

狭山藩陣屋跡Ⅱ

—一般府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う発掘調査—

大阪府埋蔵文化財調査報告2014-6

平成27年1月

大阪府教育委員会

大阪府教育委員会

狹山藩陣屋跡 II

—一般府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会

序 文

江戸時代の大阪狭山市には北条氏という大名が陣屋をかまえていました。

陣屋は、藩主の住む御殿やさまざまな役所、家老などの上級家臣たちが暮らす「上屋敷」と下級武士が住む家々が建ち並ぶ「下屋敷」に分かれていました。

現在もかつて「上屋敷」のあった狭山三丁目、四丁目付近には、当時の町割りがよく残っています。そして、「上屋敷」の中央を南北に貫く「大手筋」は、今も府道河内長野美原線として市内のメイン通りとなっています。

平成10年度から実施してまいりました府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う狭山藩陣屋跡の発掘調査も終局をむかえることとなりました。

今回の調査地点は、陣屋の「北門」付近で、藩主の「御殿」や江戸家老を勤めた「舟越仲」家の屋敷地、さらに「大手筋」の一部にあたり、陣屋の往時の姿を彷彿とさせる多数の遺構を検出しました。

さらに、北条氏の家紋である「三つ鱗」文をあしらった軒丸瓦や壮大な御殿を想像させる巨大な棟瓦も出土し、多大な成果を上げることができました。

これらの成果を「展示会・講演会」という形で、大阪狭山市教育委員会や大阪府立狭山池博物館と連携して公開できましたことは、多くの方々に『狭山藩陣屋』について、ご理解いただけた契機になったと考えています。

最後になりましたが、調査にあたって数々のご協力をいただいた地元のみなさまや富田林土木事務所に記して感謝いたします。

平成27年1月

大阪府教育委員会事務局

文化財保護課長 荒井 大作

例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて実施した一般府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う狭山藩陣屋跡（大阪府大阪狭山市東池尻二丁目・狭山三丁目所在）の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、文化財保護課調査第二グループ主査 小林義孝、副主査 林日佐子、副主査 奥和之、専門員 西口陽一、専門員 辻本武が担当し、平成26年1月9日から2月13日まで実施した。
遺物整理は、平成26年度に、調査管理グループ主査 小浜 成、副主査 藤田道子と調査第二グループが担当した。
3. 本調査の調査番号は13050である。
4. 本書に掲載した遺構写真の一部と遺物写真の撮影は、有限会社阿南写真工房に委託した。
その他の遺構写真は、小林が撮影した。
5. 本調査で作成した記録資料と出土遺物は、大阪府教育委員会で保管している。
6. 本書の編集・執筆は、小林、西口、橋本高明が担当した。
7. 発掘調査、遺物整理および本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。
8. 現地での発掘調査、遺物整理事業、および本書作成にあっては、下記の機関および個人から協力を得た。記して感謝します。
大阪人間科学大学 植松清志、堺市立泉北すえむら資料館 森村健一、大阪狭山市教育委員会、大阪府立狭山池博物館、大阪府富田林土木事務所（敬称略）
9. 本書は300部作成し、一部あたりの印刷単価は983円である。

目 次

序文	
例言	
第1章 調査に至る経過	1
第2章 位置と環境	1
第3章 調査の成果	4
第1節 1区の調査	4
(1) 1区の基本層序 (2) 4面の遺構 (3) 3面の遺構 (4) 2面の遺構	
(5) 1面の遺構 (6) 1区の変遷	
第2節 2区の調査	17
(1) 2区の基本層序 (2) 4面の遺構 (3) 3面の遺構 (4) 2面の遺構	
(5) 1面の遺構 (6) 2区の変遷	
第3節 遺物	25
(1) 1区 (2) 2区	
第4章 まとめ	42
(1) 陣屋跡の変遷 (2) 陣屋の区画 (3) 内郭付近の巨大な建築物	

挿図目次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 調査区配置図	3
第4図 1区断面図	7・8
第5図 1区4面平面図	9・10
第6図 1区3面平面図	11・12
第7図 1区2面平面図	13・14
第8図 1区2面溝5石列平面図・側面図	13・14
第9図 1区1面平面図	15・16
第10図 2区断面図	19
第11図 2区4面平面図	20
第12図 2区3面平面図	21
第13図 2区3面溝18遺物出土状況図、瓦積平面図・側面図	22
第14図 2区2面平面図	23

第15図	2区1面平面図	24
第16図	1区2面ピット(1~10)、溝5(11・12)出土土器実測図	26
第17図	1区2面溝5(13~15)、包含層(16~21)、1面土坑15(22・23) 出土土器実測図	27
第18図	1区攪乱坑出土寛永通宝拓本(原寸)	27
第19図	1区2面溝5(31~35・41~44)、ピット(36~38)、1面土坑15(39・40)、 包含層(45~47)出土瓦実測図	28
第20図	1区2面溝5出土瓦実測図(48~50)	29
第21図	1区2面溝5出土瓦実測図(51~53)	30
第22図	1区刻印瓦拓本「堺谷伝兵衛」(54~57)	31
第23図	2区4面土坑16出土土器実測図(58~83)	32
第24図	2区4面土坑16出土土器実測図(84~95)	33
第25図	2区4面土坑16(96~102)、土坑16(大手筋下層)(103~105) 出土土器実測図	34
第26図	2区4面土坑16(大手筋下層)(106~111)、3面瓦積(112・113)、 溝18(114・115)、包含層(116~118)、1面落込み22(119~122) 出土土器実測図	35
第27図	2区1面ピット20(123・124)、2面土坑(125)出土土器実測図	36
第28図	2区4面土坑16(126~136)、3面瓦積(137~143)、 溝18(144~146)出土瓦実測図	37
第29図	2区3面溝18(152・153)、1面ピット21(154)、 包含層(155・156)出土瓦実測図	38
第30図	「狭山藩陣屋上屋敷図」(書き起こし)	43

表 目 次

第1表	39
-----	----

図版目次

図版1	1区遺構
図版2	1区・2区遺構
図版3	2区遺構
図版4	1区遺構

図版5 1区遺構
図版6 1区遺構
図版7 1区遺構
図版8 1区遺構
図版9 2区遺構
図版10 2区遺構
図版11 2区遺構
図版12 2区遺構
図版13 2区遺構
図版14 1区遺物
図版15 1区遺物
図版16 1・2区遺物
図版17 2区遺物
図版18 1区遺物
図版19 1区遺物
図版20 1・2区遺物
図版21 2区遺物

第1章 調査に至る経過

平成10年度から断続的に実施してきた一般府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う狭山藩陣屋跡の発掘調査は、昨年度の調査をもって完了となった。

一般府道河内長野美原線は、江戸時代の北条氏を藩主とする狭山藩陣屋の上屋敷を南北に貫く「大手筋」にあたると考えられる。現在も大阪狭山市内では市役所、消防署、文化ホールや小・中学校が建ち並ぶメインストリートとなっている。ところが「大手筋」とは言っても、江戸時代の道をほぼそのまま府道として利用していることから、道幅が狭く、現代の交通環境には対応できない現状を抱えていた。

大阪府富田林土木事務所では、長年にわたり大阪狭山市域での道幅を広げ、歩道を設置する事業を進めてきたが、府道と南海高野線が立体交差する部分において対面通行であったために恒常的な交通渋滞を起こしていた。

今回の調査は、南海高野線と交差する箇所において対面通行を解消するための工事に伴い「狭山藩陣屋跡」遺構を損傷する部分についてのみ実施した。「狭山藩陣屋」といえば、陣屋の北方にあたり家老屋敷「舟越伸」邸とその南の藩主の御殿を含む内郭の一部にあたると考えられる（第1～3図）。

第2章 位置と環境

北条早雲にはじまり戦国時代、小田原城に依って関東を支配した北条氏の末裔が、江戸時代には河内と近江に1万1千石の所領をえて藩を起こす。その拠点である陣屋は、所領地の河内国丹南郡池尻村に構えられた。藩主の御殿や政庁を中心に上・中級藩士の屋敷などで構成される狭山藩陣屋（上屋敷）である。

陣屋は狭山池の東岸に造営されている。狭山池は、天野川が形成した谷地形を利用し、西側と東側を走る段丘を結ぶ堤防（北堤）によって川を堰き止め貯水している。陣屋は狭山池を望む安定した段丘の上に立地している。この上屋敷とは別に狭山池の東岸の景勝の地には藩主の別邸と下級藩士の長屋などで構成される下屋敷が造られた。

陣屋の建設は、元和2年（1616）にはじまり、寛永14年（1637）に、藩主御殿や政庁を中心とする上屋敷の北半分が竣工し、寛永20年（1643）には上屋敷の南半分と惣構が完成する。下屋敷の建設は延宝5年（1677）にはじまる。こうして狭山藩陣屋は全貌を現すこととなった。

しかし天明2年（1782）の大火で上屋敷が焼失する。上屋敷のこれまでの発掘調査においてもこの大火によって生じた焼土層が広い範囲で検出されるという。今回の調査でも、検出された陣屋跡に関するもっとも古い遺構は、この大火による残骸を埋めた土坑である。

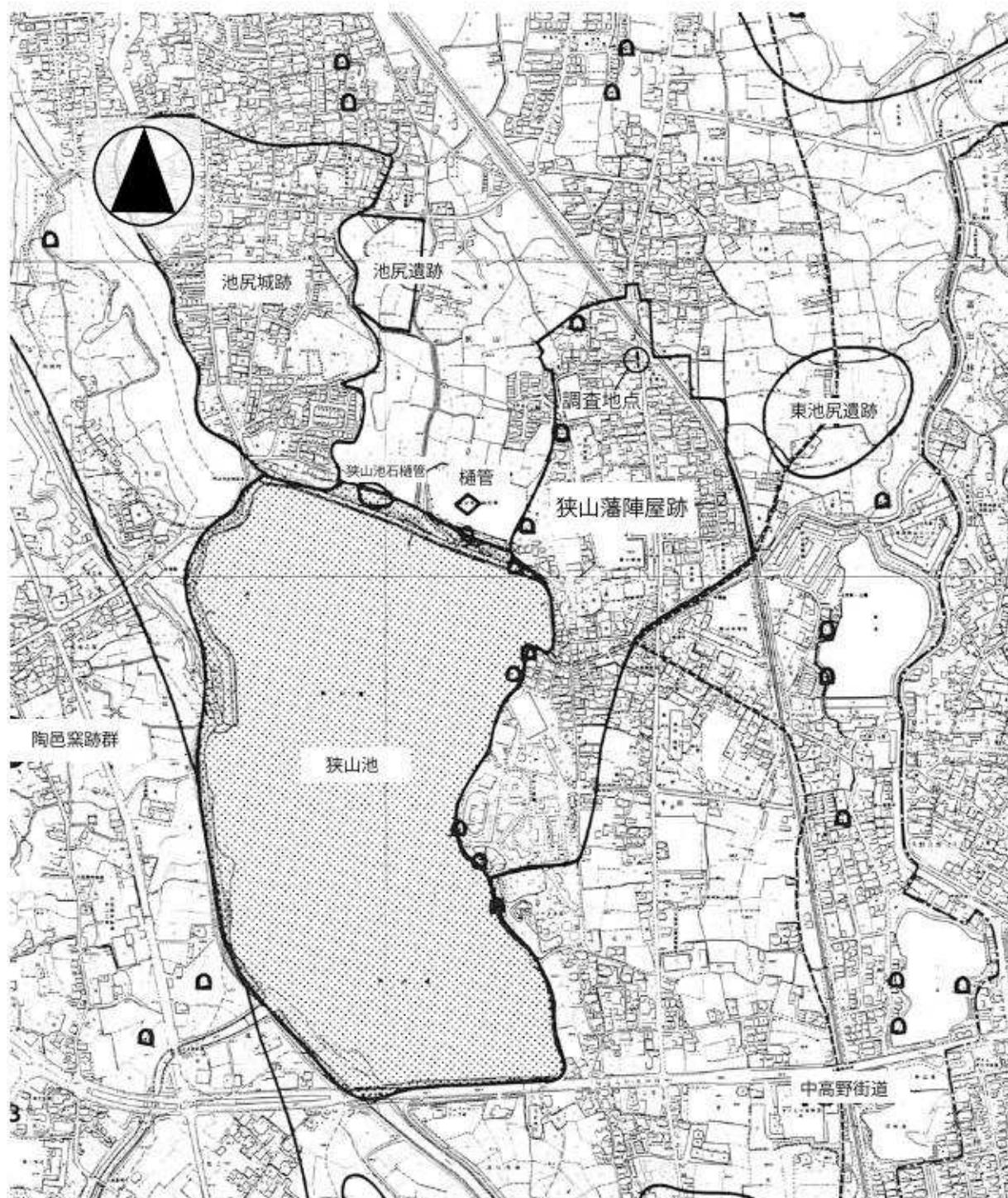
天明6年（1786）に藩主の御殿が再建され、上屋敷は引き続き整備された。今回の発掘調査でもこの再建された過程を示す遺構を検出することができた。

狭山藩は明治2年（1869）に廃止される。250年間この地に存在した狭山藩陣屋もその役割を終えた。その後、陣屋に居住していた藩士たちには屋敷や長屋などが下げ渡されたが、急速に寂れていく。明治

18年（1885）の陸軍陸地測量部による仮製図に描かれる家屋の数は少ない。

往時の狭山藩陣屋（上屋敷）の様相は伝来した絵図によってある程度把握することができる。享保年間（1716～1736）に作成された「狭山池惣絵図」をみると、陣屋を南北に貫く大手筋とその両側の藁葺屋根の家屋が描かれている。藩士の屋敷である。大手筋の南端には舟形を設け瓦葺の大手門を置く。大手筋北端の北門と東・西門は藁葺である。ここに描かれたのが天明2年の大火で失われた陣屋であろう。

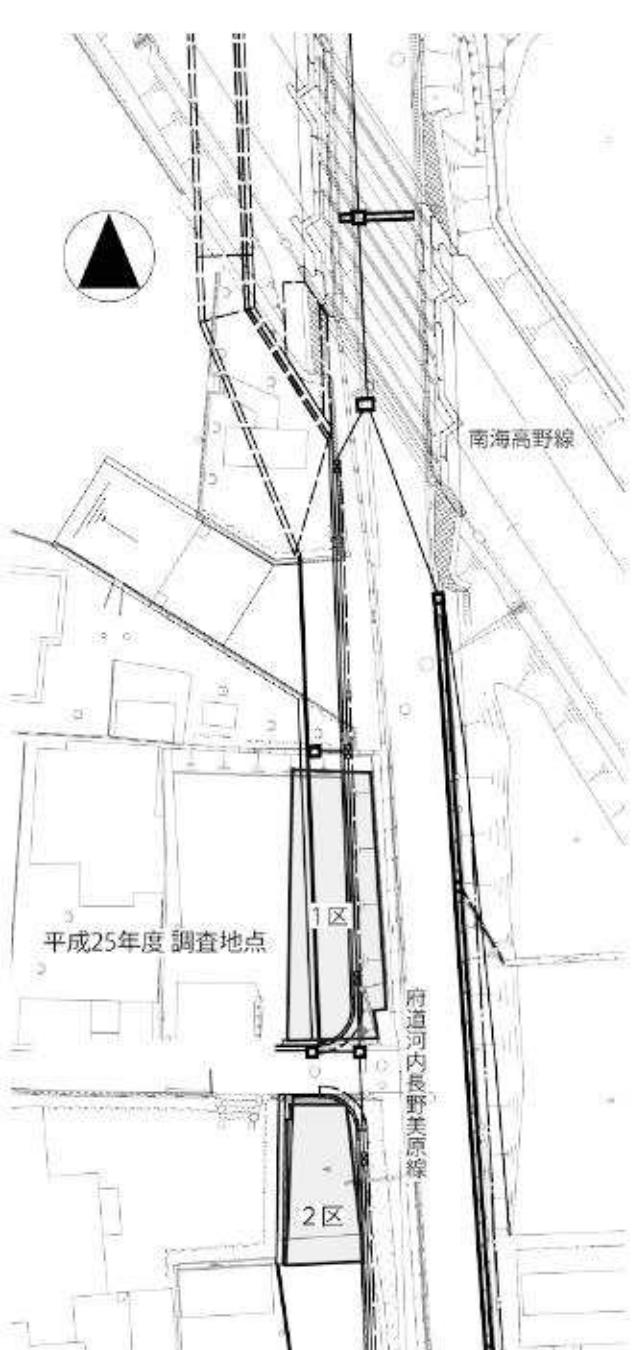
幕末から明治初期の様相は明治29年（1896）頃に描いたといわれる「狭山藩陣屋上屋敷図」にみえる。



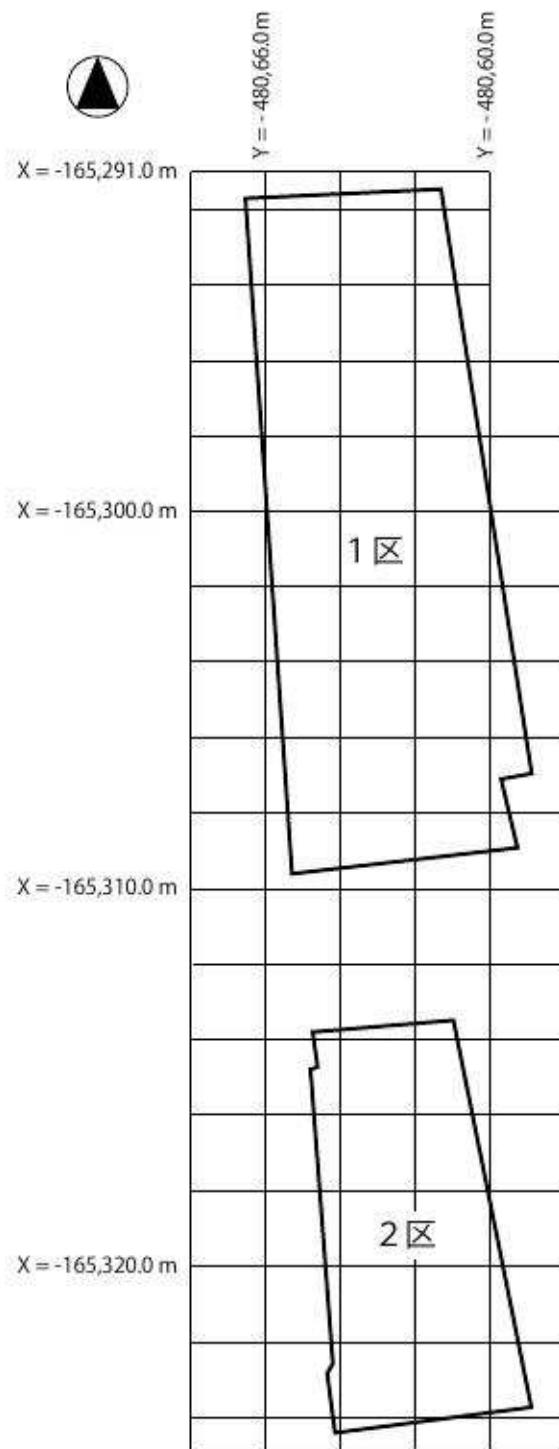
第1図 遺跡位置図

ここに、大火の後に再建された陣屋の姿をとどめている。大手筋や四方に設けられた門など大火以前の陣屋を踏襲していることは明らかである。陣屋の北部の最も標高が大きい場所に内郭を設け、ここには藩主の御殿や政庁などの施設を置く。大手筋沿いには上級藩士の屋敷を設け、東側の一部に中下級藩士の居住地を設定している。現在の陣屋跡（上屋敷）の土地区画は同図に描かれたとおりである。

今回の調査区は、陣屋跡の北端部分、大手筋に面した舟越仲家屋敷と内郭の東部分に当る。



第2図 調査区位置図



第3図 調査区配置図

第3章 調査の成果

第1節 1区の調査

1区では大手筋の一部（1区東部）と舟越仲家の屋敷跡の一部（1区西部）、さらに両者の間の石列の護岸をもつ水路跡を主に検出した。またそれらの遺構の変遷もある程度把握することができた。

遺構は、地山面上（4面）、地山面もしくは地山面上の整地層上面（3面）、大手筋と屋敷が機能していた段階（2面）、大手道が東へ移動した段階の遺構面（1面）で検出された。

（1）1区の基本層序（第4図）

大手筋の層序 大手筋に当たる調査区東部と屋敷跡に当たる西部では、土層の堆積状況はまったく異なる。

大手筋は地山上に積んだ暗灰褐色粘質土（下層）と暗黄灰褐色粘質土（上層）の2層の整地層により形作られる。どちらもほとんど遺物を含まず、均質な土砂による土層である。これら大手筋のベースとなる土層の上には砂・小石・瓦のなどを突き固めて造った厚さ数cmの層が確認できた。この層の上面が大手筋の路面に当たるものと推定される。表土と厚さ10cm前後の盛土を除去すると大手筋の路面が検出された。

舟越仲家の屋敷跡の層序 大手筋の西側に沿って作られた水路の東側は舟越仲家の屋敷跡である。当該調査区は、屋敷跡の東端に当たる。屋敷跡の前を流れる水路の護岸の石列を造営するために掘り返されたことで土層が乱され、さらに切り合う多くの遺構もあり、基本的な土層を連続して把握することは難しかった。

復元的に想定すると地山層上（4面）に2層の整地層（下層：黄褐色粘質土③、上層：褐色粘質土（細砂・微砂混じる）④）が置かれる。この上面が2面である。この上に大手筋が検出された東部も含めて調査区全体に整地が施され（この上面が1面）、さらにその上に表土層が形成されている。

（2）4面の遺構（第5図）

陣屋造営以前の遺構は調査区南部で検出された。東西南北の方位にはぼのる溝と小形のピットである。溝1は、幅95～50cm、深さ20cm前後を測る断面が浅いU字形を呈する東西方向の溝である。西に向かって次第に幅を狭める。埋土は淡茶褐色の粘土質のシルトである。この溝に平行して北側に造られた溝2は、南側の法面と底部の一部を検出した。遺存している幅は約50cm（復元幅約80cm）、深さは約25cmを測る。埋土は溝1と同じく淡茶褐色の粘土質のシルトである。埋土中から瓦質の土器片が出土した。溝3は、長さ約3.2m、最大幅約60cm、深さ約25cmを測る南北方向の溝である。

検出された3条の溝以外にピット3個を検出した。直径35～40cm、深さ10～20cmを測る。さらに長さ約1m、幅50cm、深さ10cm前後を測る楕円形の落ち込みを検出した。

これらの時期を厳密に設定することは困難であるが、埋土の状況や少量の出土遺物から判断して、狹山池陣屋の造営以前、おおむね中世後期に帰属するものと推定される。

(3) 3面の遺構（第6図）

屋敷跡と大手筋に平行する水路跡を限るように1条の柵列（柵列4）を検出した。柵跡は15個の柱跡で構成されており、遺存していた全長は約14mを測る。ほぼ南北方向に走るが北端の3個の柱跡は西北に屈曲している。屋敷跡の北端を示す可能性がある。また、半数の柱跡はほぼ同じ場所で重複し、近接して類似した柱跡も検出されている。当該の柵跡は、造り換えられたと考えられる。個々の柱跡は、直径25cm前後、深さは20~30cmを測る。半数の柱跡の底部に扁平な石材を置いている。

柵列4は、2面で検出された水路跡の護岸のための石組の下部から検出されており、石組の掘り方によって上部が削られているため、本来、築かれた面は確認できなかった。この遺構は地山面で検出されたが、2面との間の整地層のうち下層の黄褐色粘質土上面から切り込んでいる可能性が想定される。

(4) 2面の遺構（第7・8図）

大手筋 調査区東部の大手筋跡と西部の屋敷跡、両者を画する水路（溝5）を検出した。大手筋は全長約16.5m、2m前後の幅で検出された。本節（1）「1区の基本層序」で記したように砂や小石、瓦の小片を突き固めた路面が確認できた。大手筋跡の範囲では基本的に遺構は検出されなかった。調査区のほぼ中央部の大手筋跡の縁部で、直径40cmの大きさで遺存し、深さ30cm前後を測る土坑が検出された。大手筋跡の路面を形成する層を除去した時点で検出されている。

屋敷跡 東西1~2mの範囲で細長く検出した。屋敷跡の東端部に当たる。直径1m前後を測る大形の土坑、直径30cm前後の小形のピットが多くみられた。南部の土坑群は掘立柱建物の一部を構成する可能性があり、中央部の遺構は水路と平行して検出されており、第3面で検出された柵跡と類似した遺構に復元される可能性がある。いずれの遺構から瓦片を中心とする遺物が多くみられた。とりわけピット6~11・13からは特徴的な遺物が出土した。

水路跡 溝5は、調査区の中央部を南北に走る。全長約16.5m、幅70cm前後を測る。屋敷跡側（西側）には護岸のための石列が検出された。大手筋側（東側）の北部でも長さ2m前後の範囲で石列を検出しており、大手筋側でも本来石列遺構が存在した可能性が想定される。

西側の石列遺構は、ほぼ直線的に南北に走り、北端部でわずかに西に屈曲する。第3面で検出した柵列4とほぼ重複する。縦横20cm、厚さ10cm前後のやや扁平な石材を使った石組は、南部で3段、中部で2段、北部では1段が遺存していた。3段が確認できた部分でみると、石列はほぼ垂直に積まれている。最下段の底面の高さは、南端が高く、北にむかって次第に低くなり、北端との比高は約15cmを測る。水路の底面に対応し、南から北へ水が流れているのは明らかである。また、石組の中に1点石臼を打ち割つて石材に転用したものもあった。

大手筋側では護岸の石列遺構はほとんど検出されなかった。わずかに西側の石列遺構の北端部分に対応するように1段の石列が2mほど検出された。

溝5からは埋め戻した土砂のなかから瓦類を中心とする大量の遺物が出土した。なかでも藩主の北条

氏を象徴する三つ鱗文の瓦は注目すべきものである。

(5) 1面の遺構（第9図）

表土・盛土の一部を除去した段階で検出した遺構面である。瓦片を主とする遺物が規則性をもって検出された。遺物群は2つの性格をもっている。ひとつは調査区中部で瓦の比較的大きな破片が散在した状況で出土したものである。この付近において存在した盛土の下層に遺物を廃棄した土坑15の遺物である。

もうひとつは、調査区南端から、ほぼ直線的に約10mの長さで遺物が列をなしたかのようの出土したものである（瓦列遺構）。この遺物の列は第2面で検出した水路西側の石組遺構の石材の真上の位置に当る。水路の廃棄後に、屋敷と水路の跡地の境界を示す目的に配列されたのであろう。

これらのほかにいくつかの土坑や攪乱坑が検出されたが、この内、土坑14は扁平な円碟が多く出土したが、その中にいくつか特徴的な遺物が出土している。

(6) 1区の変遷

1区では4時期の遺構の変遷を把握することができた。

① 狹山藩陣屋が造営される以前、中世後期にあたる地山面上（4面）で溝やピットなどを検出した。おおむね東西南北の方位によって溝などが造られている。

② 3面は地山面かその上部に施された整地層（下層の黄褐色粘質土）上で柵列が検出された。柵列は北端で西側に屈曲している。この時点では大手筋と西側の水路がすでに造営されており、大手筋、水路、屋敷の関係は形作られている。しかし水路に護岸の石列は築かれていない。

③ 2面では、3面の狭山藩陣屋跡の遺構群を引き継いで、大手筋、水路、屋敷が併存する。水路は西側に護岸の石列が造られる。東側の大手筋の縁部にも石列の護岸が造られていた可能性がある。護岸の石列は、3面の柵列を踏襲しており北端で西側に屈曲する。東側の石列の北端も西側の石組に対応するように終わっており、この地点が屋敷の北端にあたるものと考えられる。

④ 近代になり水路が廃止され近隣の建物の解体で生じた瓦類などで埋められ屋敷の敷地と大手筋が同一平面となる。しかし、かつての水路の肩部は土地境界として意識されており、1面で検出した瓦片などの遺物を列状に配列することにより明示していたと考えられる。

2面で検出された柵列4は、大手筋の側溝（水路）と舟越仲家の屋敷を画すものである。3面ではこの位置に側溝（水路）の法面に石列を築く。ここが屋敷地の東限である。大手筋に面した舟越仲家屋敷のこの部分については、堀が建てられていたという記録がある。3面で検出された石列の水路護岸の上には堀が建てられていたのであろう。もっとも整った陣屋の姿である。

石列で護岸された溝5を埋めた土砂の中や1面で検出された遺構の中から巨大な瓦が出土している。大屋根の棟にのせる雁振瓦と考えられ、付近に巨大な建物の存在が予想される。さらに溝5からは三つ鱗文の鳥衾の破片も出土しており、当該調査区の南側に所在した陣屋内郭からの遺物であると考えられる。陣屋が廃止され次々と建物が解体される様子を彷彿とさせる。

第2節 2区の調査

2区では、大手筋と側溝、その西側の屋敷跡（藩主御殿を中心とする陣屋内郭）の一部が主に検出された。側溝の西側の肩部に柵を設け、屋敷を外部と画している。大手筋の路肩に打ち割った平瓦などを用いた瓦積が構築されていた。また、この遺構面の前後の時期の遺構面を検出し、当該調査区における土地利用の変遷も把握することができた。

遺構は、地山面上（4面）、大手筋と屋敷が仮整備された段階（3面）、屋敷が整備された段階と大手筋が東へ移動した段階が同一面で把握された（2面）、大手筋と屋敷が一体となった段階（1面）で検出された。

（1）2区の基本層序（第10図）

調査区の東部は大手筋に当たる。大手筋は作り替えられており、当初のものは地山上に整地を施し路面を形成した（4面）。陣屋が被災した大火災の後、ここに残骸を処理するための巨大な土坑を掘削する。ここに盛土が施され、新たな大手筋の路面が形成される。それに対応する西部の遺構は地山面上で検出される（3面）。調査区西部で整地が施され施設が整備された段階を経て、調査区全体が平坦に整地された段階（2面）、さらに全体に盛土がされた段階（1面）、そしてその上部に表土が形成される。

（2）4面の遺構（第11図）

大手筋の路面から掘削した大形の土坑2基を検出した。土坑16は長さ約9.7m、検出した最大幅約1.4m、深さ約45cmを測る。灰や炭などとともに瓦片を中心に陶磁器など日常雑器の破片が大量に出土した。火災の残骸の処理のためにここに廃棄したものである。遺構は東側に延びる。

土坑17も、大手筋から掘り込まれた遺構である。検出された長さは約3m、最大幅は約1.6m、深さ約40cmを測る。砂から粘質の土がほぼ水平に堆積している。

（3）3面の遺構（第12・13図）

大手筋と側溝 4面の土坑を埋め戻して、きれいな土砂を薄く敷いて整地し、その上部に砂や小石などを突き固めた土層で覆う。この上面が3面の大手筋の路面である。大手筋は長さ約10m、検出された最大幅約1.4mを測る。

大手筋の西側に最大幅約1.2mを測る側溝が造られる（溝18）。側溝の深さは、大手筋の路面から側溝底部まで30～35cm、西側の屋敷跡からは15～20cmを測る。大手筋の西側路肩には瓦積が造られる。側溝の底部からは、大量の完形の平瓦を含む瓦類などが出土している。とりわけ南部では、直径（一辺）10～20cm前後を測る角のとれた石材を敷き詰めたように出土し、側溝の東側法面に完形の平瓦や丸瓦が列をなすかのような状況で出土した。

瓦積 大手筋の西縁辺に瓦積が構築されていた。調査区の北端部から約8mの長さで検出された。平瓦、平瓦を打ち割った破片を小口積にしている。10～12段に瓦を積み、高さは30cm前後を測る。瓦積一列のみである。大手筋の側溝である溝18の底部から直接積み上げる。

瓦積が施された範囲は、廃棄土坑である土坑16が埋め戻された場所にあたり、埋土の崩壊を防ぐために、瓦積を施したものと考えられる。

柵列19 側溝の西側の肩部で検出された14個の柱跡で構成される。柱跡の中心においてその間隔は約1mを測る。個々の柱跡は直径35cm前後、深さ35~40cmを測る。柱跡の底部に礎石は設置されていない。屋敷跡の東限を画す遺構である。

屋敷跡 屋敷跡は後世に攪乱されており、ピットなどが検出されたにすぎない。これらによって建物跡などを復元することはできなかった。

(4) 2面の遺構（第14図）

断面の観察によると調査区の西部に盛土を施し、大手筋の路面とほぼ同じ高さの平面をつくる。この面が火災の後、施設が整備された面であろう。次に大手筋の側溝（溝18）を埋め、さらに屋敷地に盛土を施し、大手筋にも薄く盛土を施しており、調査区全体が平坦に整地されている。

3面で側溝の西側の肩部に柵跡が検出されたが、その上部では柵跡と同じ位置に石列が検出された。直径（1辺）5~25cmを測る石材を、屋敷側に面を揃えるように並べられている。調査区南部で約1.3m、中部では約2m分を検出した。中部の石列から北に向う長さ約4m、幅30cm前後、深さ数cmを測る溝は、石列を抜き取った跡である。

同一の平坦面に整地しながらも、屋敷跡と大手筋・側溝の部分を明確に分別するために設置したものと考えられる。第2面で検出された遺構もほとんどが、かつての屋敷跡に相当する部分である。

調査区の北部で、長方形の瓦質の容器を据えた遺構が検出された。容器は火鉢と想定されるが用途は不明である。

(5) 1面の遺構（第15図）

表土を除去した時点で検出した遺構面である。深さ10~20cm前後の土坑やピットなどが検出された。これらの性格は不明であるが、一部の遺構の埋土に灰や炭が顕著であったものもある。ピット20・21、落ち込み（攪乱）22では特徴的な遺物が出土した。

(6) 2区の変遷（第15図）

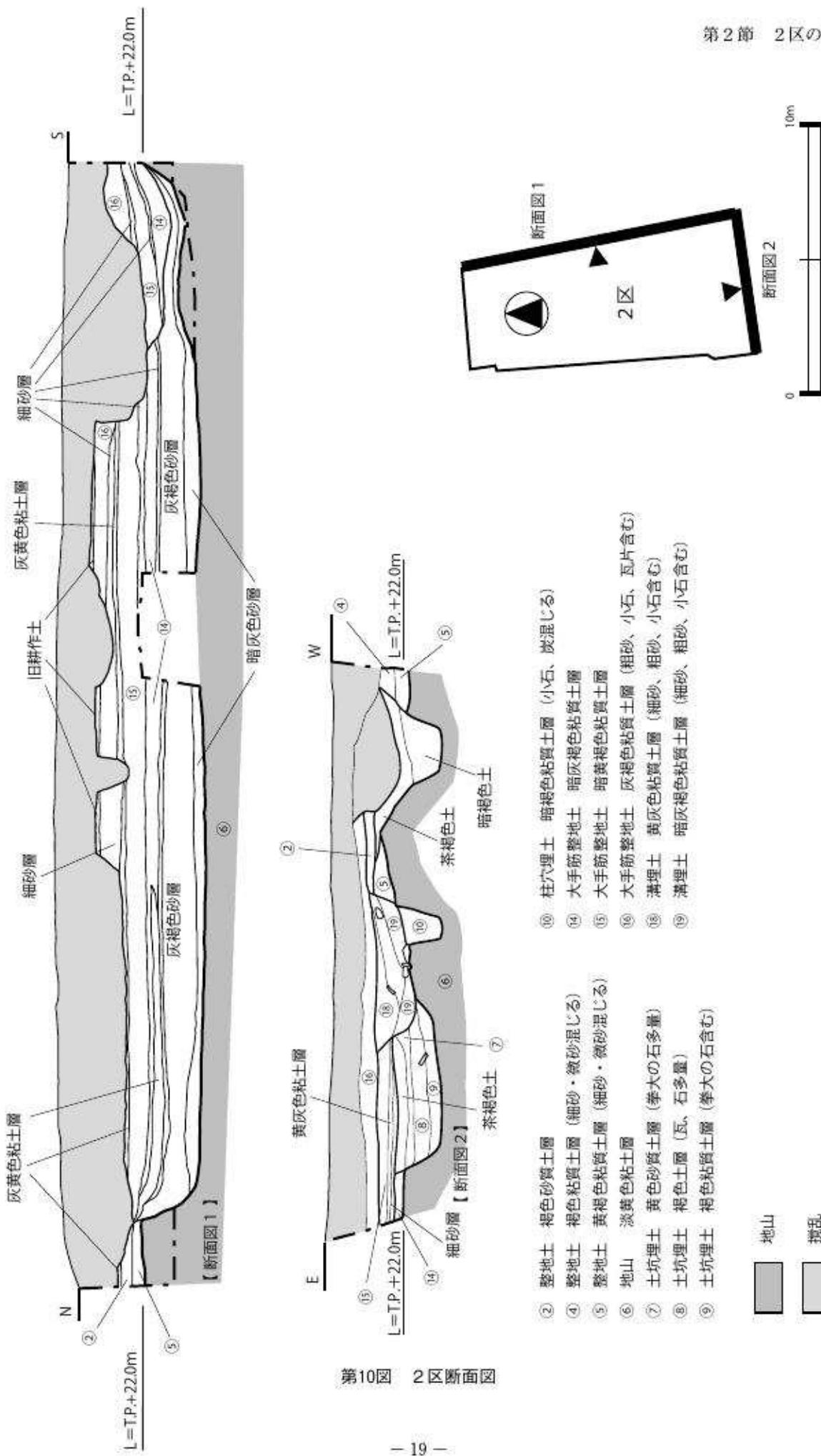
2区では4時期の遺構の変遷を把握することができた。

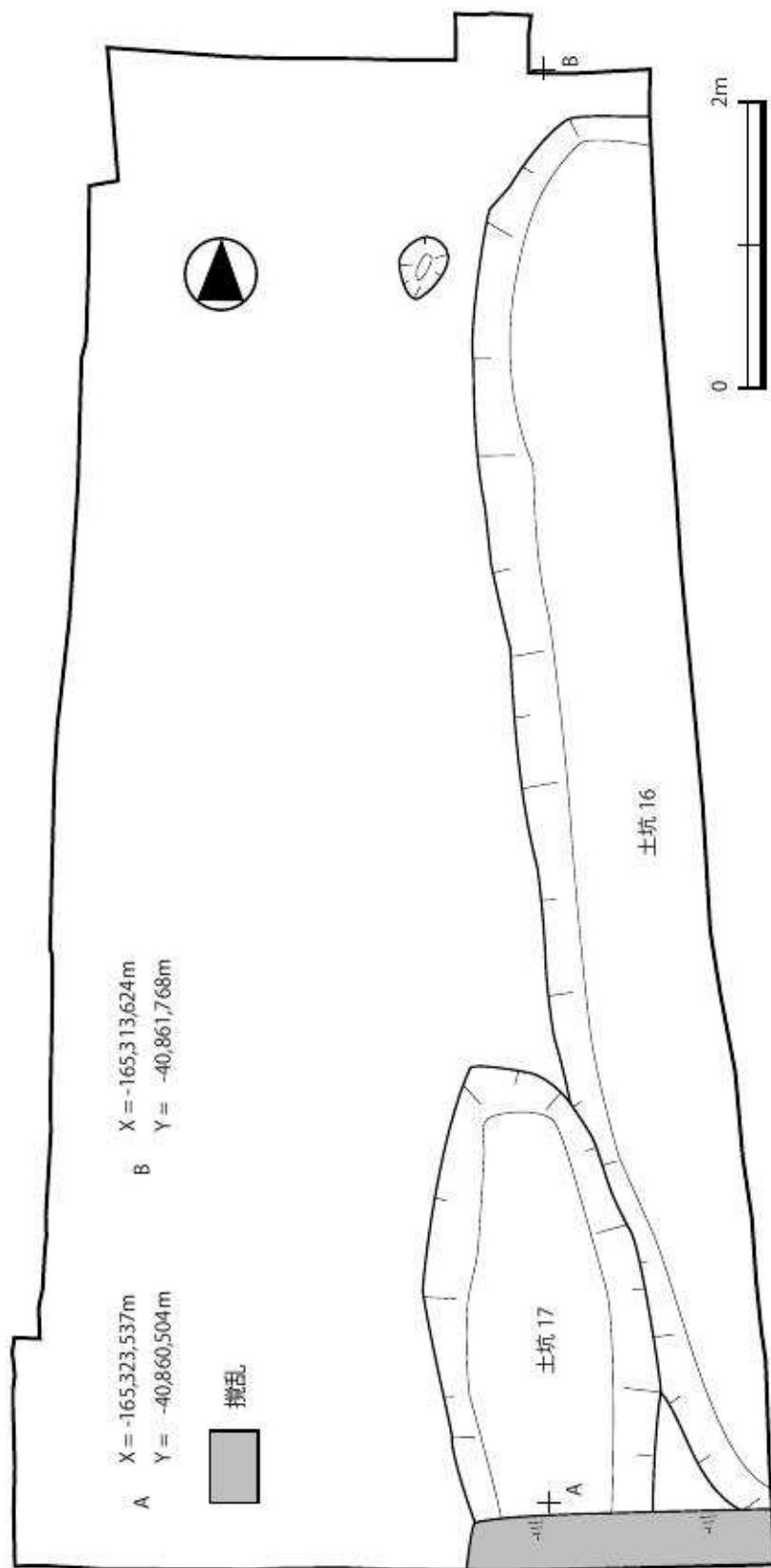
① 狹山藩陣屋が焼失してその残骸の整理のために大手筋に巨大な廃棄土坑（土坑16）が掘削される（4面）。

② 3面は大手筋が整備され、西側の屋敷との間に側溝が掘られ、屋敷の縁辺に柵が設けられる。

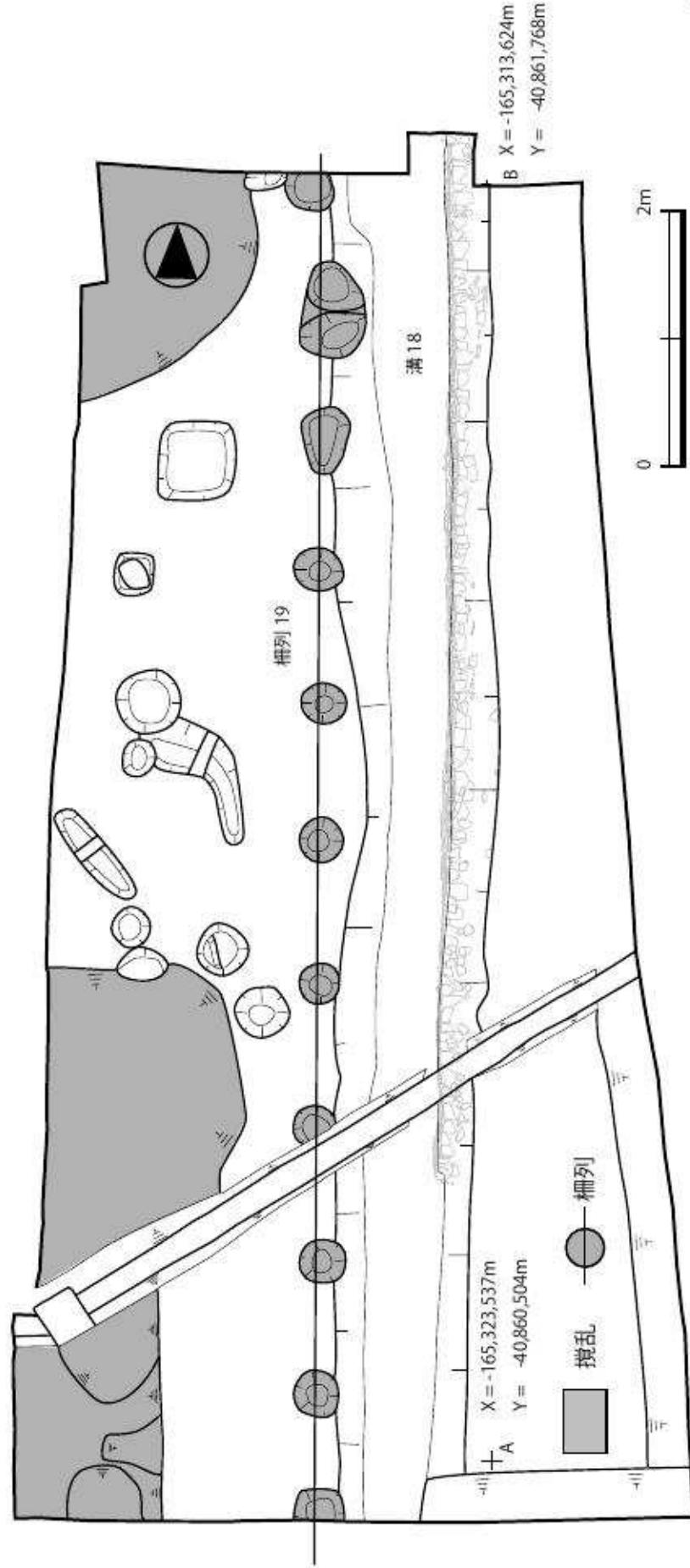
③ 2面では、3面上に盛土が施され大手筋と同じ高さの平面を造った段階。さらに大手筋が東側に移動し、当該調査区が整地され同一平面の土地になる段階がある。しかし屋敷と大手筋、側溝という土地の公私を区別する意識が残っており、かつての側溝の西側肩部、柵跡の上部に石を並べて境界とする。

④ 1面では、当該地全体がひとつの敷地となり住宅地となる。

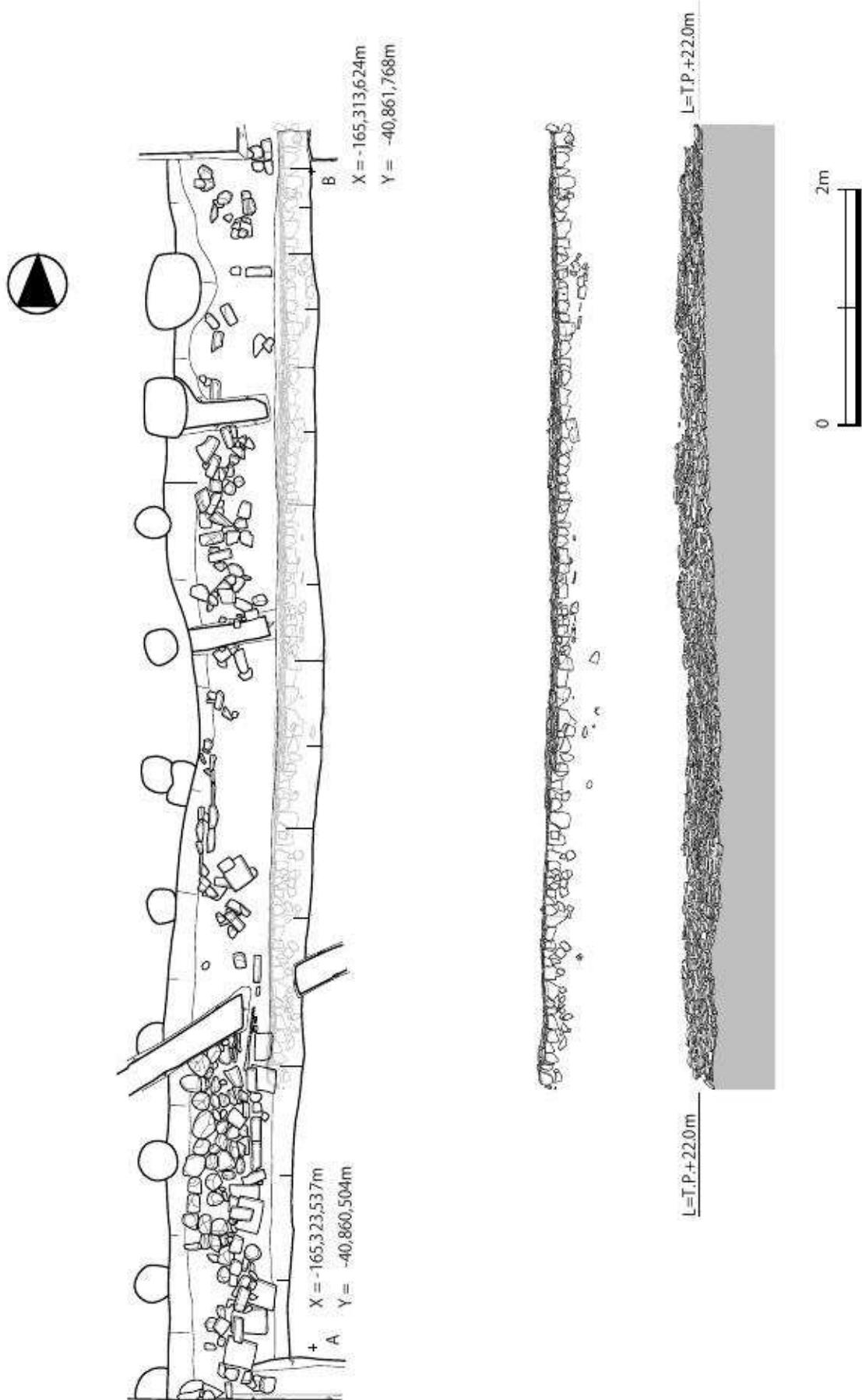




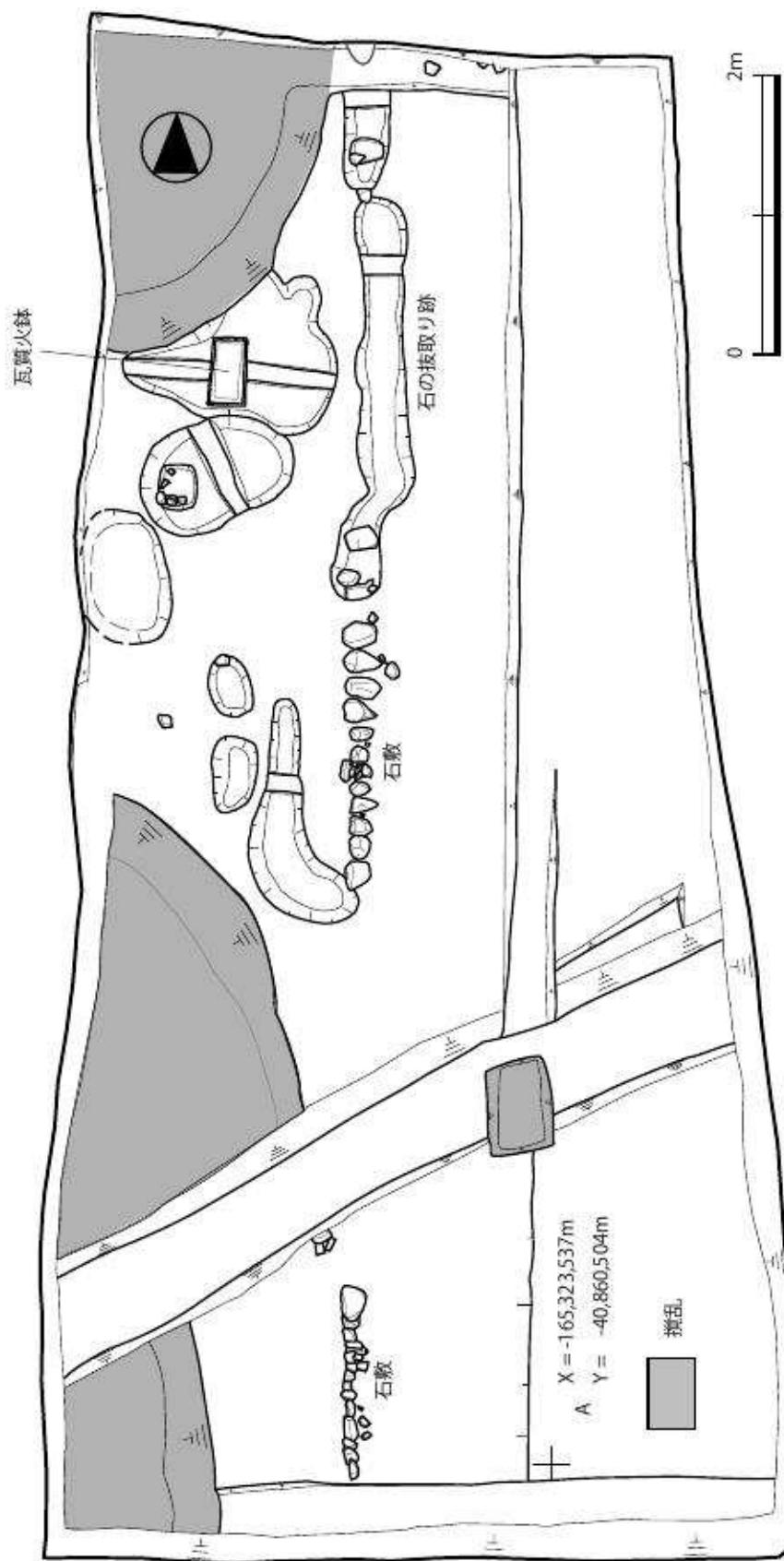
第11図 2区4面平面図



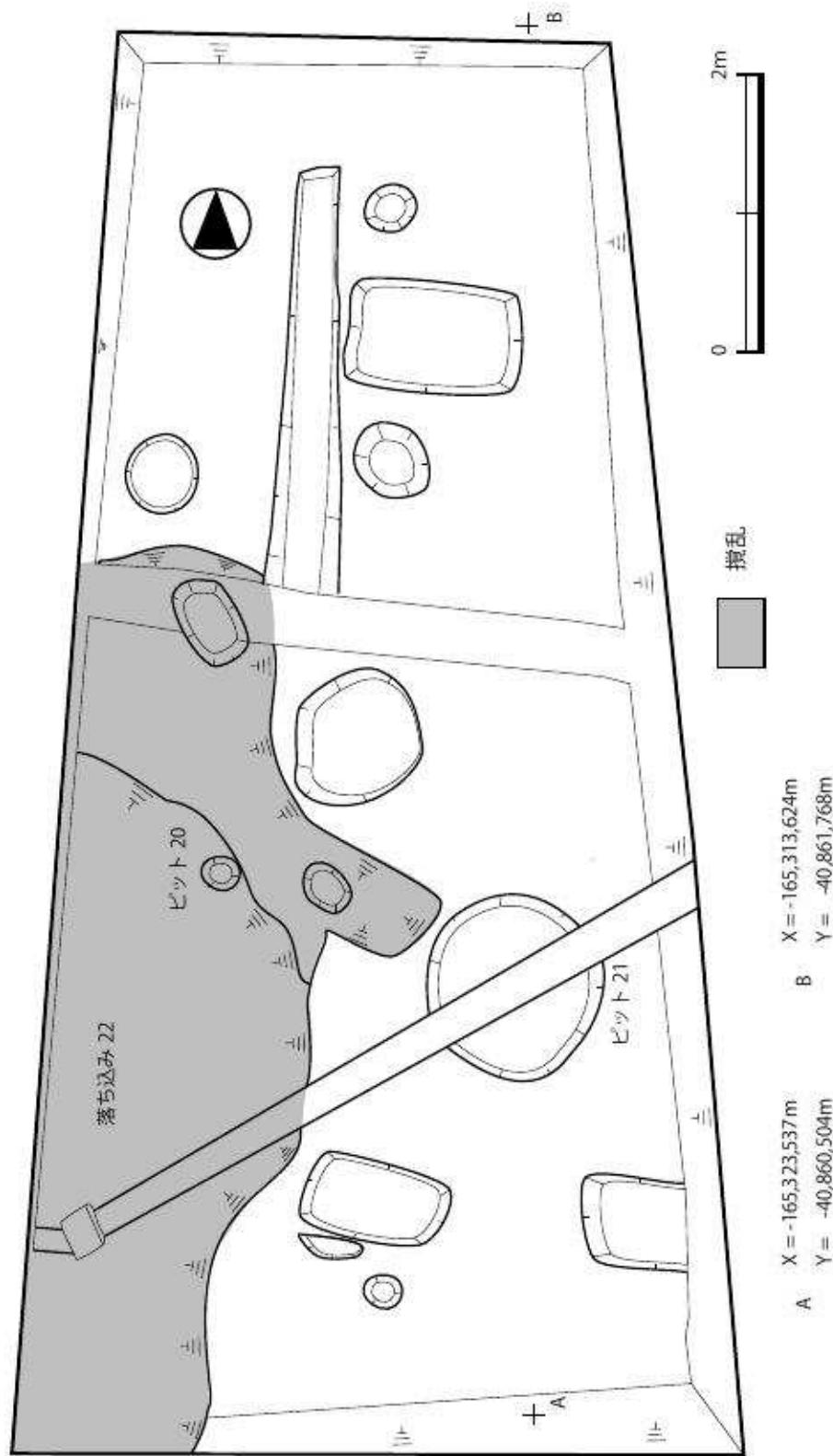
第12図 2区3面平面図



第13図 2区3面溝18遺物出土状況図、瓦積平面図・側面図



第14図 2区 2面平面図



第15図 2区1面平面図

第3節 遺物

今回の調査では、遺物収納用のコンテナ（38cm×59cm×14cm）で、189箱の遺物が出土した。その内の177箱が瓦で、12箱が陶磁器類である。調査面積が1区・2区合わせて150m²と狭いのに、瓦の出土量のとても多いのが特徴である。

(1) 1区 1区の1面では、土坑15から江戸時代（19世紀）の波佐見焼の碗（第17図22）や雪平（第17図23）と共に、唐草文の軒棧瓦（第19図40）・軒平瓦（第19図39）や鉄鎌（図版16）が出土した。

1区の2面では、ピットから江戸時代（19世紀）の波佐見焼の碗（第16図1）や小型高坏（第16図2）や瀬戸焼の碗（第16図3）・肥前京焼系の碗（第16図4）・唐津三島手の鉢（第16図5）・焼塩壺（第16図6）・丹波焼すり鉢（第16図7）や土師器のコノロ（第16図8）・堺すり鉢の水指（第16図9）・すり鉢（第16図10）、巴文軒丸瓦（第19図36～38）などが出土した。

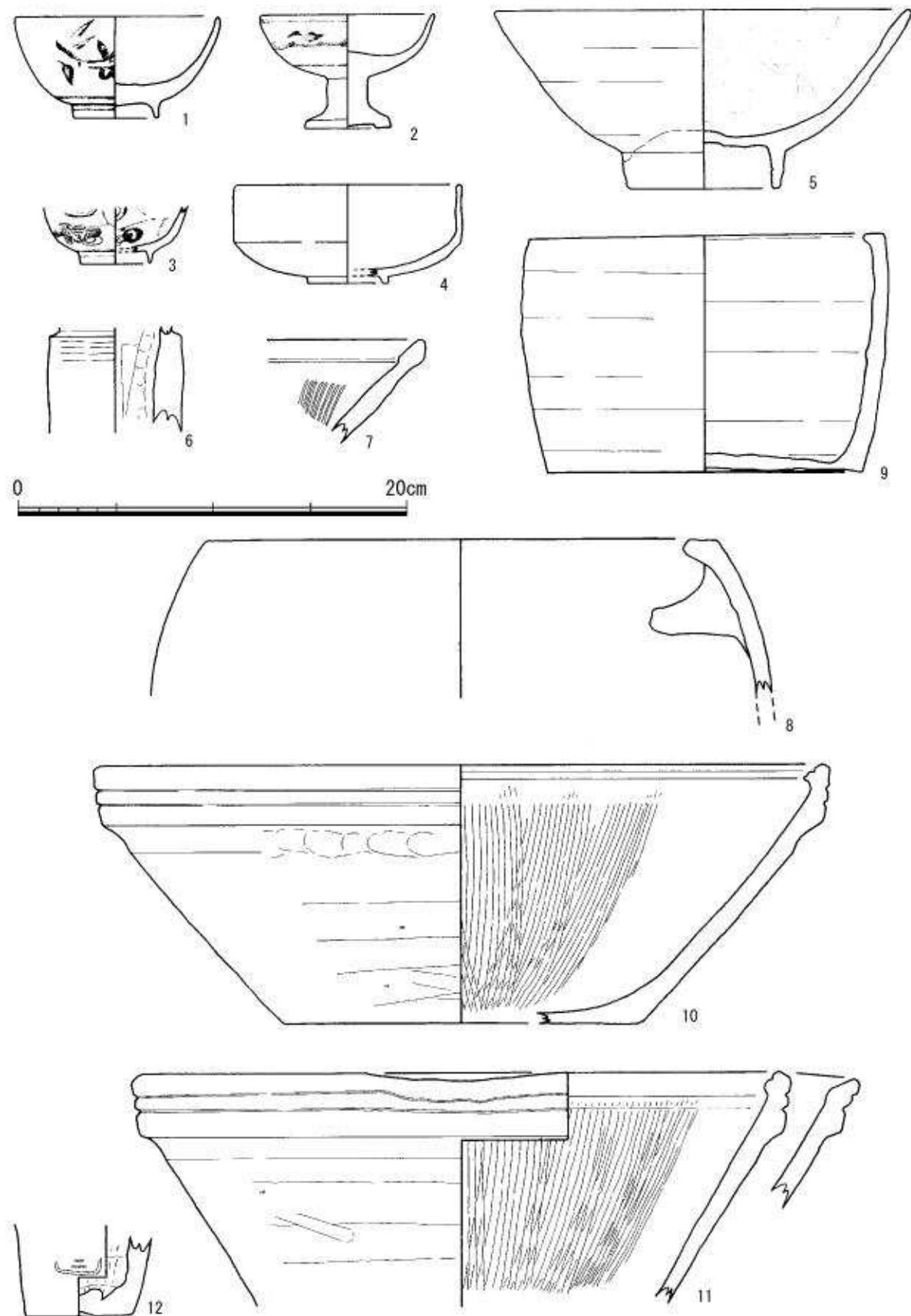
同じく、1区2面の溝5からは、堺すり鉢（第16図11）や焼塩壺（第16図12）・青磁染付の皿（第17図13・14）や長崎県江永焼の抹茶茶碗（第17図15）などが出土した。

また、溝に瓦を一括投棄したらしく、三つ鱗文の鳥衾（第19図31）・巴文の軒丸瓦（第19図32・33・41～43）・唐草文の軒平瓦（第19図34・44）・文様不明の軒平瓦（第19図35）などが出土した。三つ鱗文は、北条氏の家紋であるので、これらの瓦は、藩主の御殿に葺かれていた瓦と考えられた。三つ鱗文の部品と推定される平瓦の破片の縁辺部を三角形に磨いたものも1区1面土坑15から出土していて（図版20）、土壙などに三つ鱗文をレリーフで飾り付けたものかと推定された。

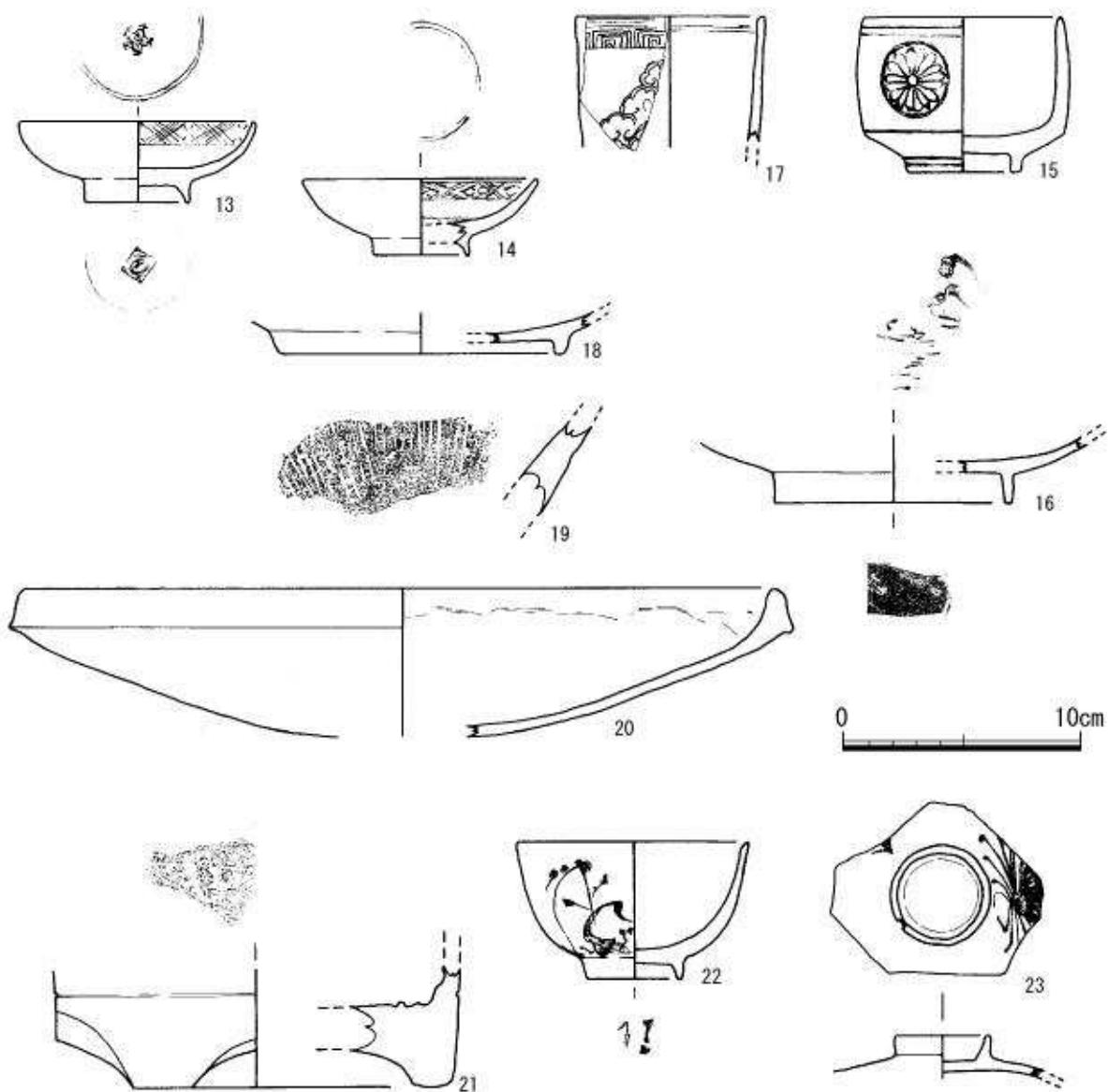
また、以上の軒丸や軒平の瓦は、普通サイズであるのに対し、飛び抜けて大きい瓦も出土した。雁振瓦と推定しているものがそれで（第20図48～50、第21図51～53）、いずれも細かく砕けていた。ほぼ完形に接合されたもの（第21図53）は、長さ43cm幅84cm厚さ3cm、重さは19.5kgあり、完形品だと20kgはあると推定された。一端に幅6cmの突帯を貼り付けて段が作られ、重ね合わせられるようになっていて、断面形は緩やかな山形を呈していた。端面が鉛直に切られているので、井戸瓦とはなり得ず、巨大な雁振瓦と推定された。雁振瓦には、段の作りが丸く緩やかなもの（第20図48～50、第21図51・52）と角張るもの（第21図53）の違いもあった。

また、以上の瓦に混じって、刻印瓦も4点出土していて（第22図54～57）、線で囲われた長方形の枠内に「堺谷伝兵衛」と書かれていた。「伝兵衛」の文字が崩し字で書かれているのが特徴である。この「堺谷伝兵衛」は、大阪府立中之島図書館に所蔵されている「大坂瓦屋仲間記録」とされている一群の江戸時代の古文書の中に登場する。寛政10年（1798）・文化7年（1810）と年代が知られ、今回の瓦が堺の谷伝兵衛という瓦屋によって焼かれた瓦であったことが判明した。

また、以上の1区1面土坑15や2面の溝5出土の瓦を含む遺物については、そのいずれもが江戸時代の19世紀を中心とした時期の遺物であることから、天明2年（1782）の陣屋焼失後、天明6年（1786）に再建された狭山藩陣屋の建物が、明治の廢藩によって取り壊された際の遺物ではないかと考えられた。



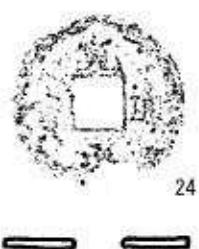
第16図 1区2面ピット(1~10)、溝5(11・12)出土土器実測図



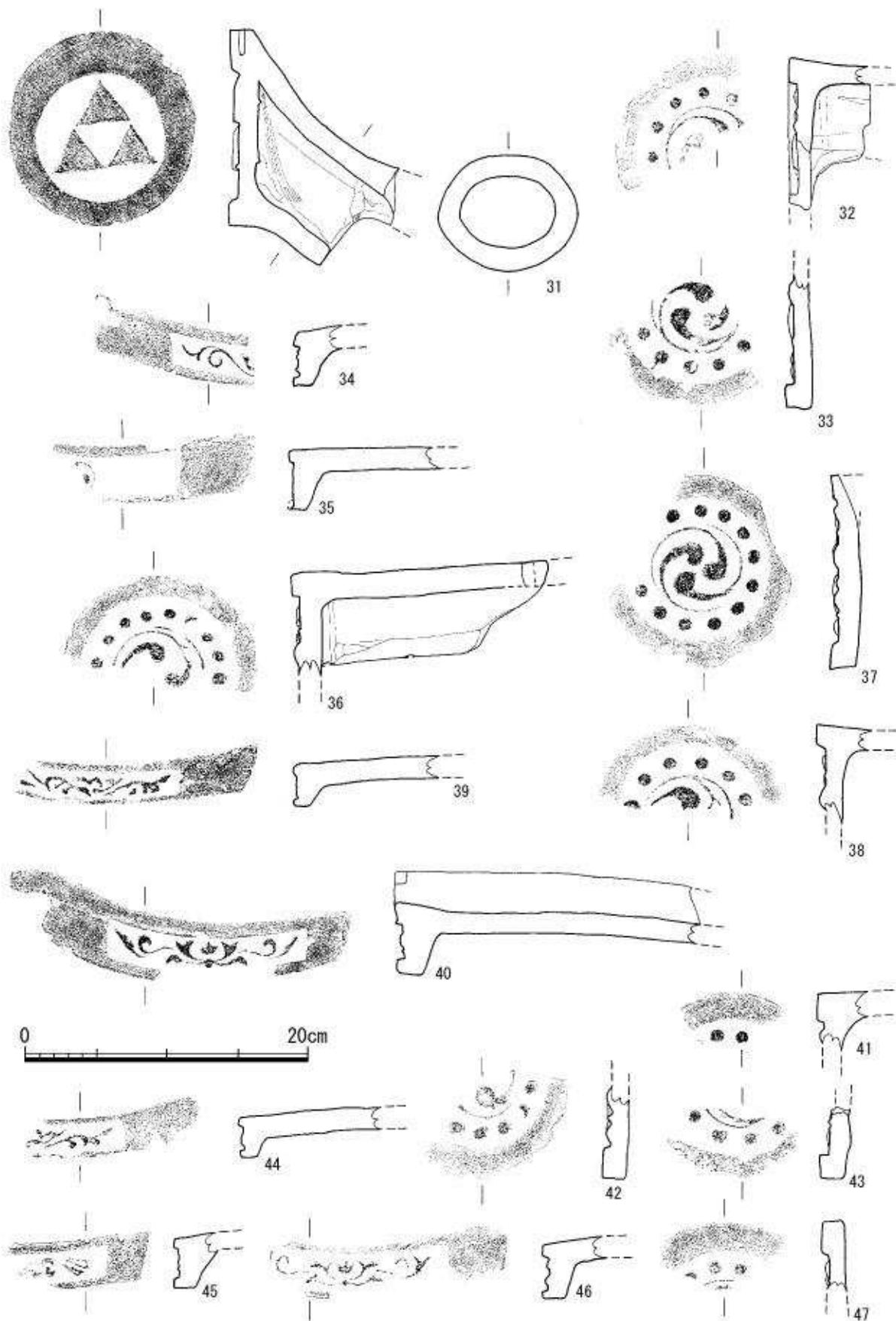
第17図 1区2面溝5（13～15）、包含層（16～21）、1面土坑15（22・23）出土土器実測図

1区の遺物包含層中からは、「木下矢」と刻印された肥前京焼系の皿（第17図16）、17世紀の景德鎮の香炉か筒茶碗（第17図17）、中国漳州窯五彩盤（第17図18）などの陶磁器の他、備前焼のすり鉢（第17図19）、ほうらく（第17図20）、刻印の入った土師器鉢（第17図21）、灰緑色粘板岩製の石硯（図版16・26）などの他、唐草文軒平瓦（第19図45・46）・巴文軒丸瓦（第19図47）も出土した。

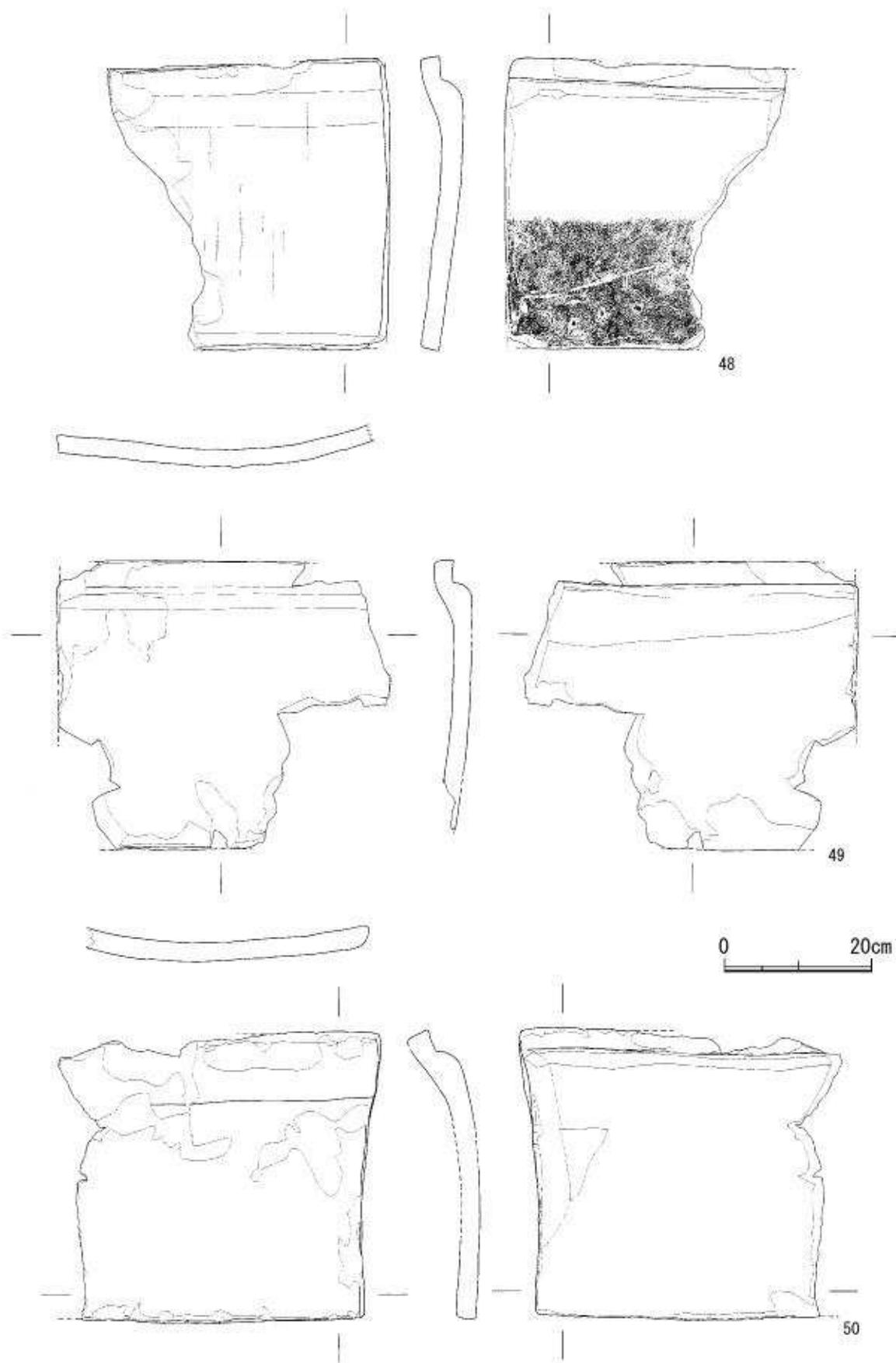
また、1区南端の攪乱坑中からは、江戸時代の寛永通宝（第18図24）も出土し、側溝からは、明治時代の方眼が切られた黒色粘板岩製の石盤も出土した（図版16・27）。



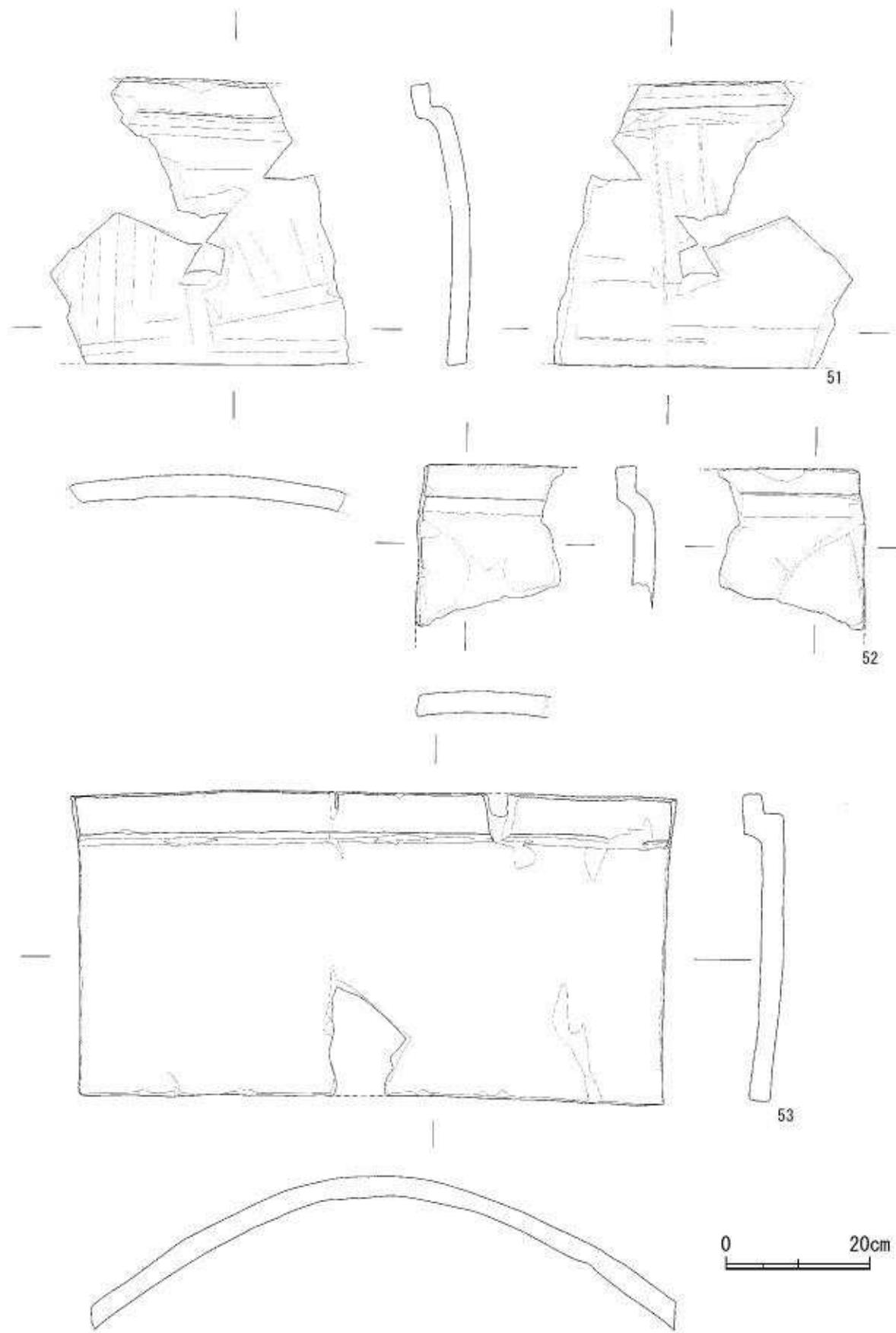
第18図 1区攪乱坑出土 寛永通宝拓本（原寸）



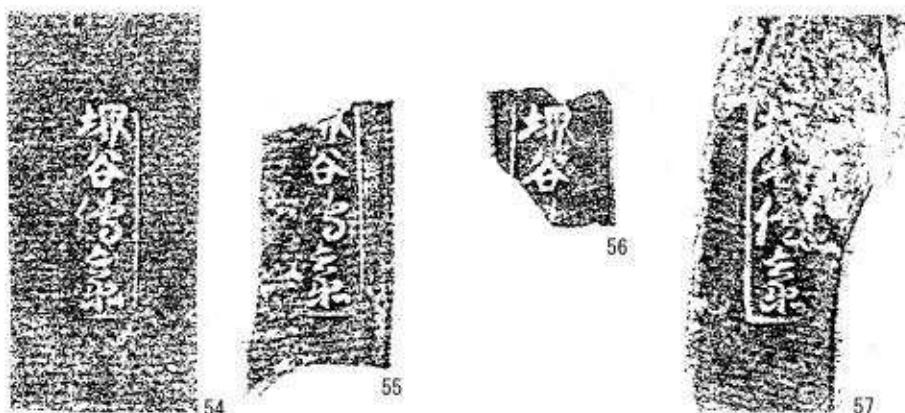
第19図 1区2面溝5 (31~35・41~44)、ピット (36~38)、1面土坑15 (39・40)、包含層 (45~47) 出土瓦実測図



第20図 1区2面溝5出土瓦実測図 (48~50)



第21図 1区2面溝5出土瓦実測図 (51~53)



第22図 1区刻印瓦拓本「堺谷伝兵衛」(54~57)

(2) 2区

2区の1面では、ピットから火鉢（第27図123）・土師器小皿（第27図124）・巴文軒丸瓦（第29図154）が出土した。落込み22からは、瀬戸鎧手の茶碗（第26図119）・三島唐津の鉢（第26図120）・土師器の人形（第26図121）・瀬戸焼の鉢（第26図122）など明治時代の陶磁器類が出土した。

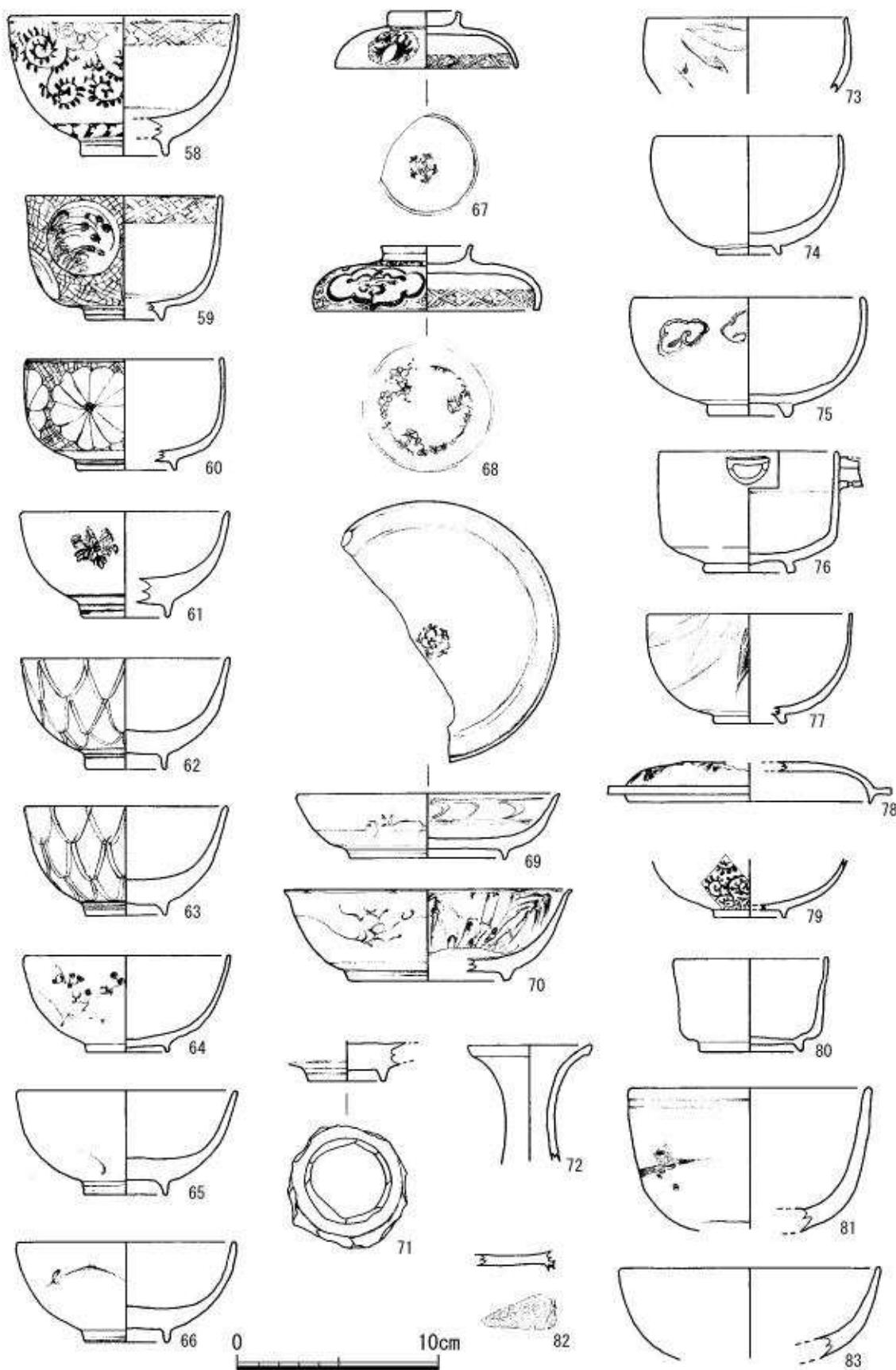
2区の2面では、土坑中から4脚の瓦質角形火鉢（第27図125）が完形で出土した。

2区の3面では、溝18から波佐見焼の碗（第26図114）や堺すり鉢（第26図115）が出土した。また、溝中に瓦を一括投棄したらしく、唐草文の軒平瓦（第28図145・146）や巴文の軒丸瓦（第28図144）の他、中央に線を入れ、S字文様を描いた熨斗瓦（第29図152）や重さ約2kgある平瓦の完形品（第29図153、図版21-e）などが多数出土した。

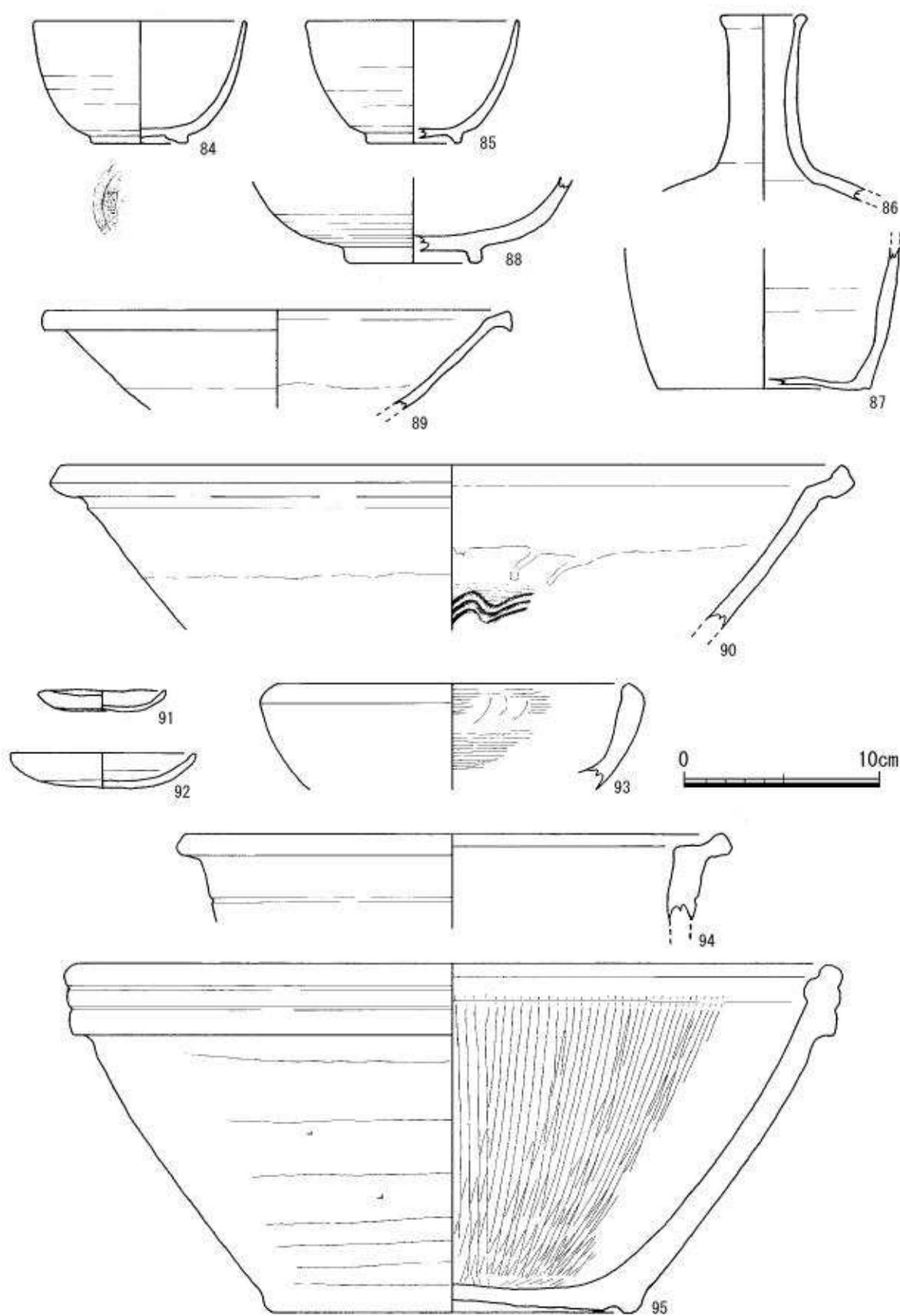
同じく、2区3面の瓦積からは、焼塙壺の蓋（第26図112）や堺すり鉢（第26図113）が出土した。また、瓦積に使われた瓦は、ほとんどが打ち割られた平瓦片であったが、中に巴文軒丸瓦（第28図137・138）や唐草文軒平瓦（第28図139・140・142・143）・唐草文軒桟瓦（第28図141）なども混じっていた。

2区の4面では、土坑16から多数の遺物が焼土や炭片と共に出土した。発掘当初は、大手筋の下層を掘り下げている途中で遺物が出土し始めたので、大手筋下層としたが、その後、土坑16上層のものと判明した。

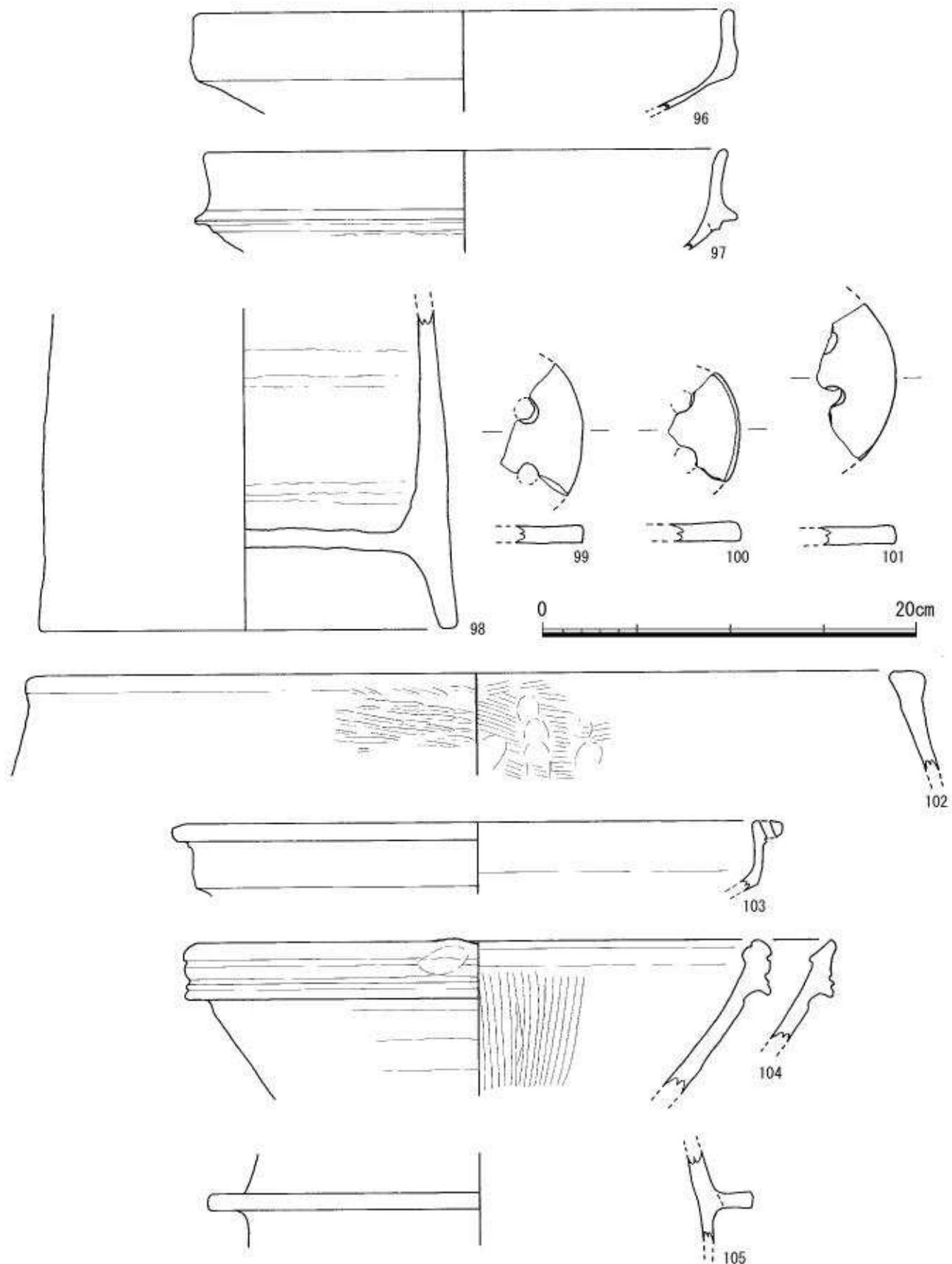
土坑16からは、波佐見焼の碗（第23図58～66）、蓋（第23図67・68）、丸皿（第23図69）、小鉢（第23図70）、とっくり（第23図72）、肥前京焼系の碗（第23図73～75）、柄付き碗（第23図76）、京焼の碗（第23図77）、京・信楽系の蓋（第23図78）、蜻足唐草の小皿（第23図79）、産地不明の碗（第23図80）、江永焼の碗（第23図81）、底部裏面に線刻のある磁器（第23図82）などが出土した。質の悪い竜泉窯の青磁碗（第23図83）は、15世紀のもので、混入品であろう。また、刻印があって朝日焼と分る碗（第24図84・85）、丹波焼のとっくり（第24図86・87）、瀬戸灰釉の鉢（第24図88・89）、三島唐津の大鉢（第24図90）などの陶器の他、土師器灯明皿（第24図91・92）、瓦質火鉢（第24図93）・七輪（第24図94）、堺すり鉢（第24図95）、ほうらく（第25図96・97）、土師器火鉢（第25図98）・すのこ（第25図99～101）、湧焼大甕（第25図102）などが出土した。



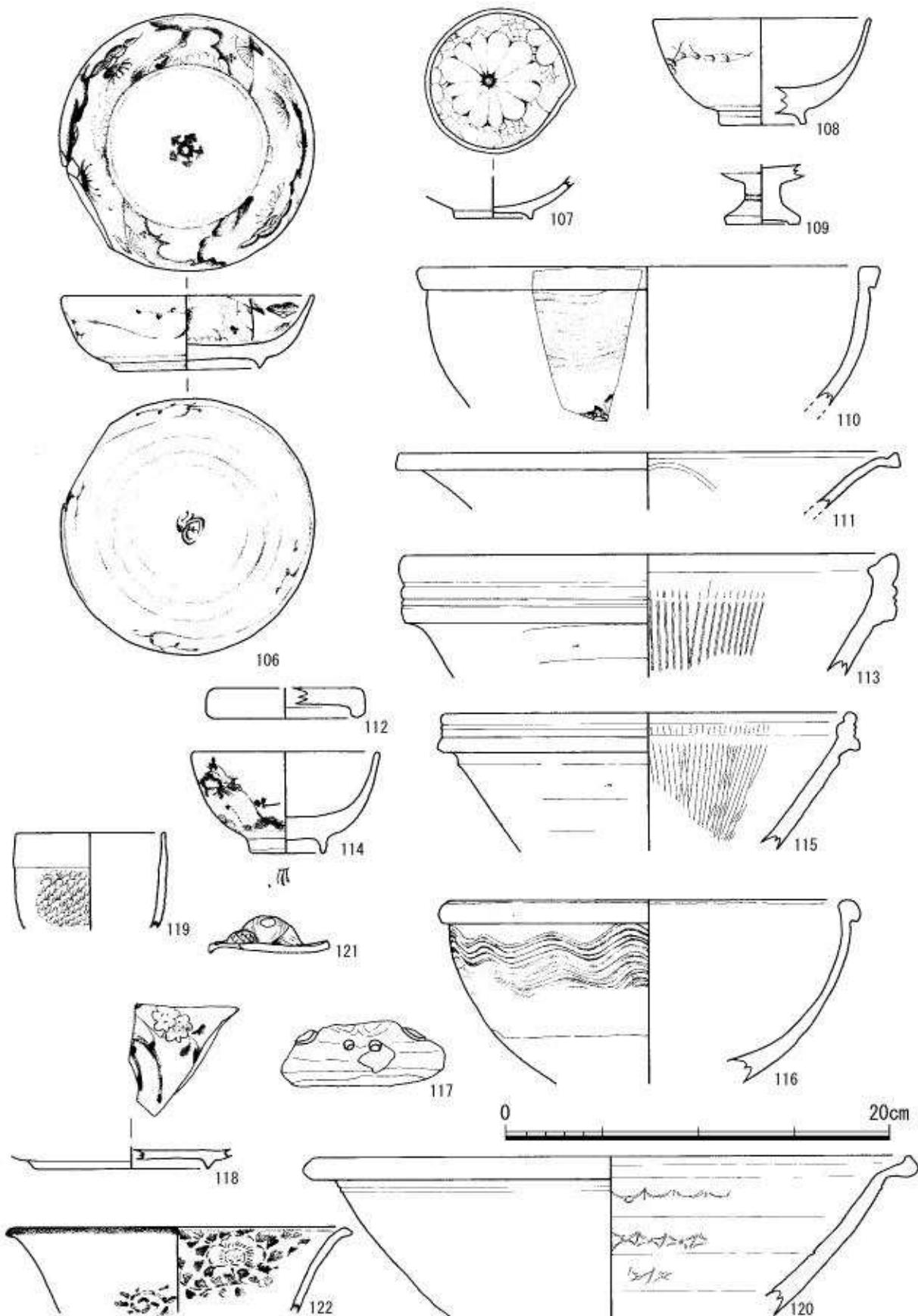
第23図 2区4面土坑16出土土器実測図 (58~83)



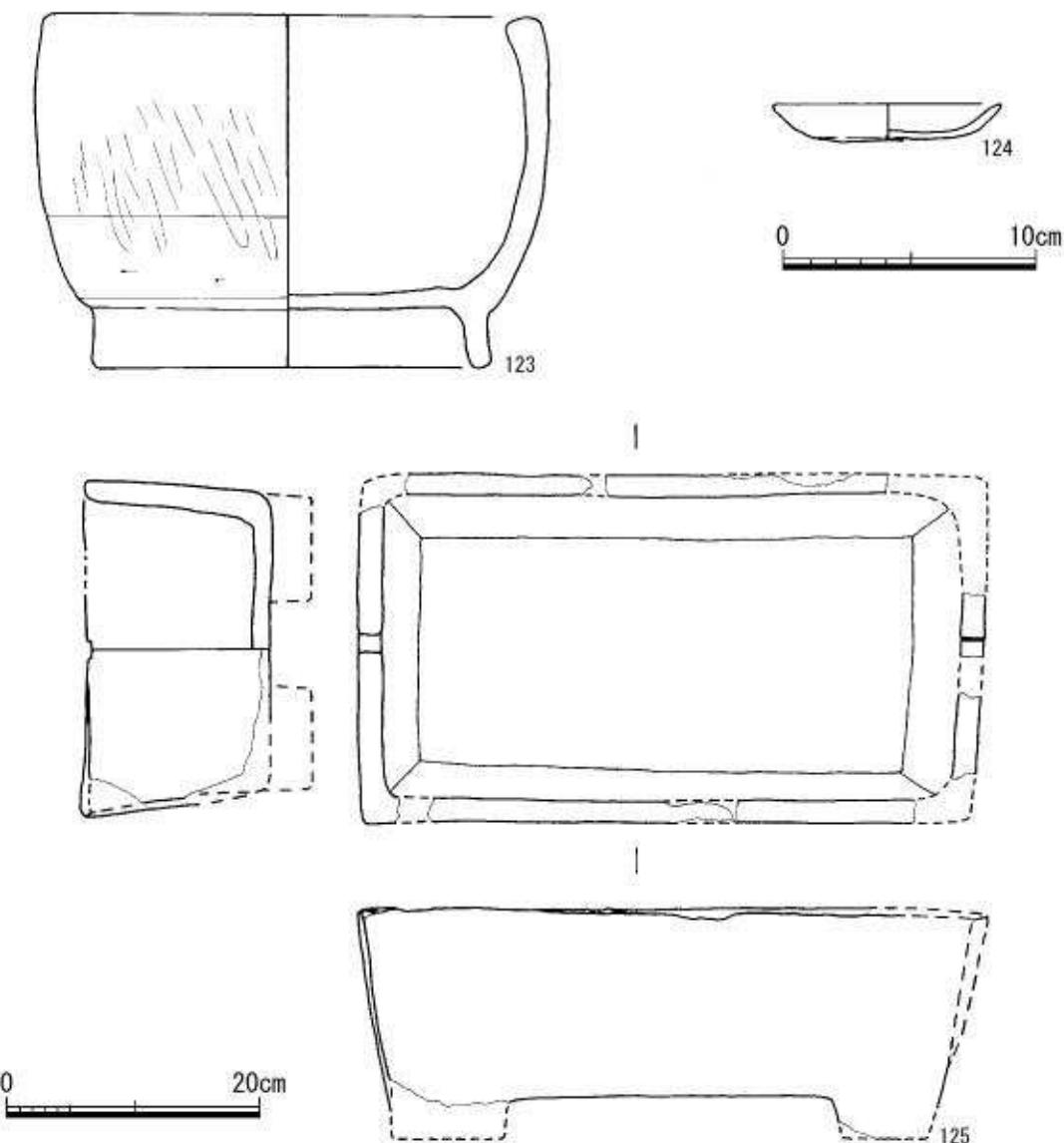
第24図 2区4面土坑16出土土器実測図 (84~95)



第25図 2区4面土坑16（96～102）、土坑16（大手筋下層）（103～105）出土土器実測図



第26図 2区4面土坑16（大手筋下層）（106～111）、3面瓦積（112・113）、溝18（114・115）、包含層（116～118）、1面落込み22（119～122）出土土器実測図

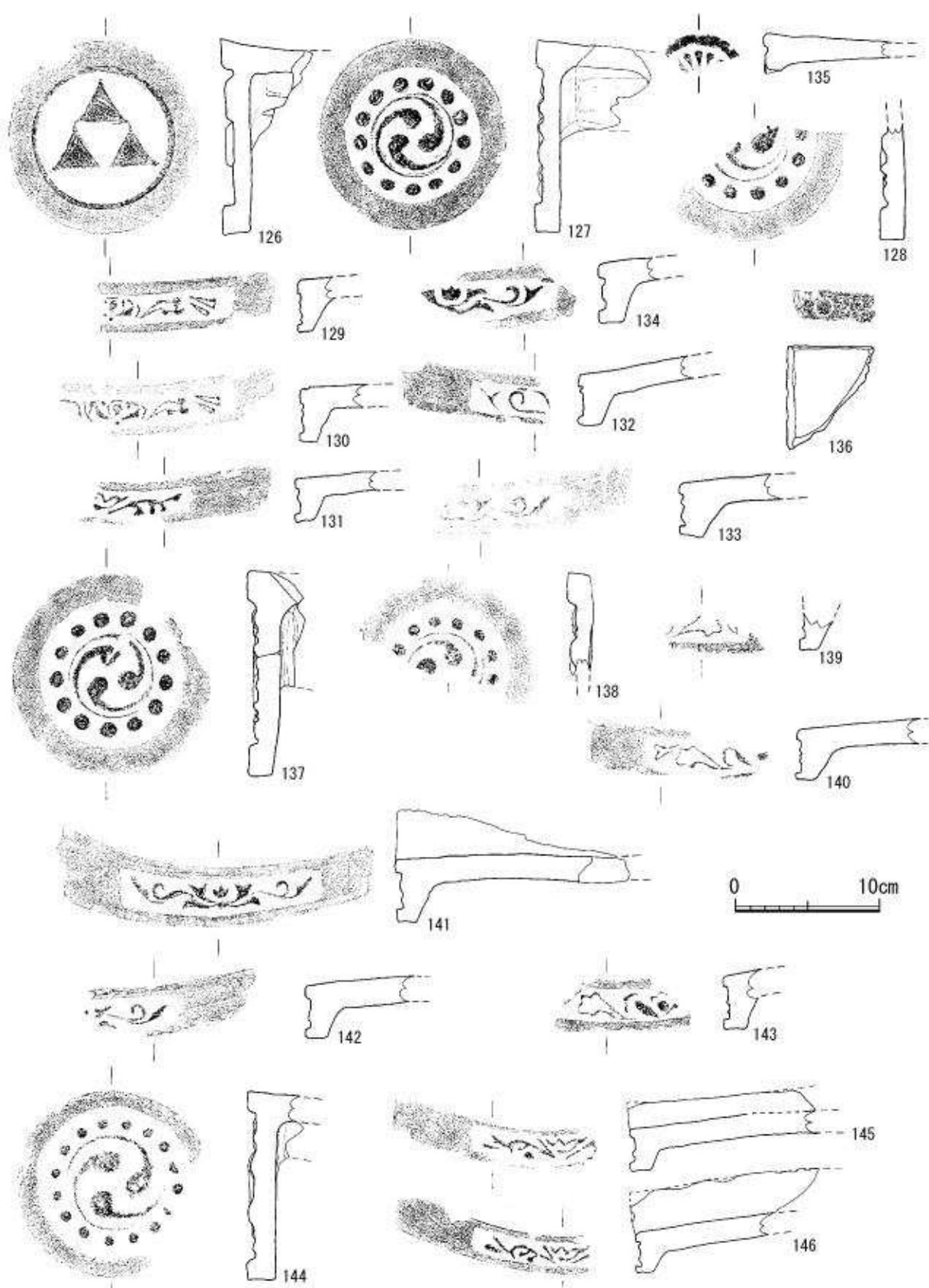


第27図 2区1面ピット20(123・124)、2面土坑(125)出土土器実測図

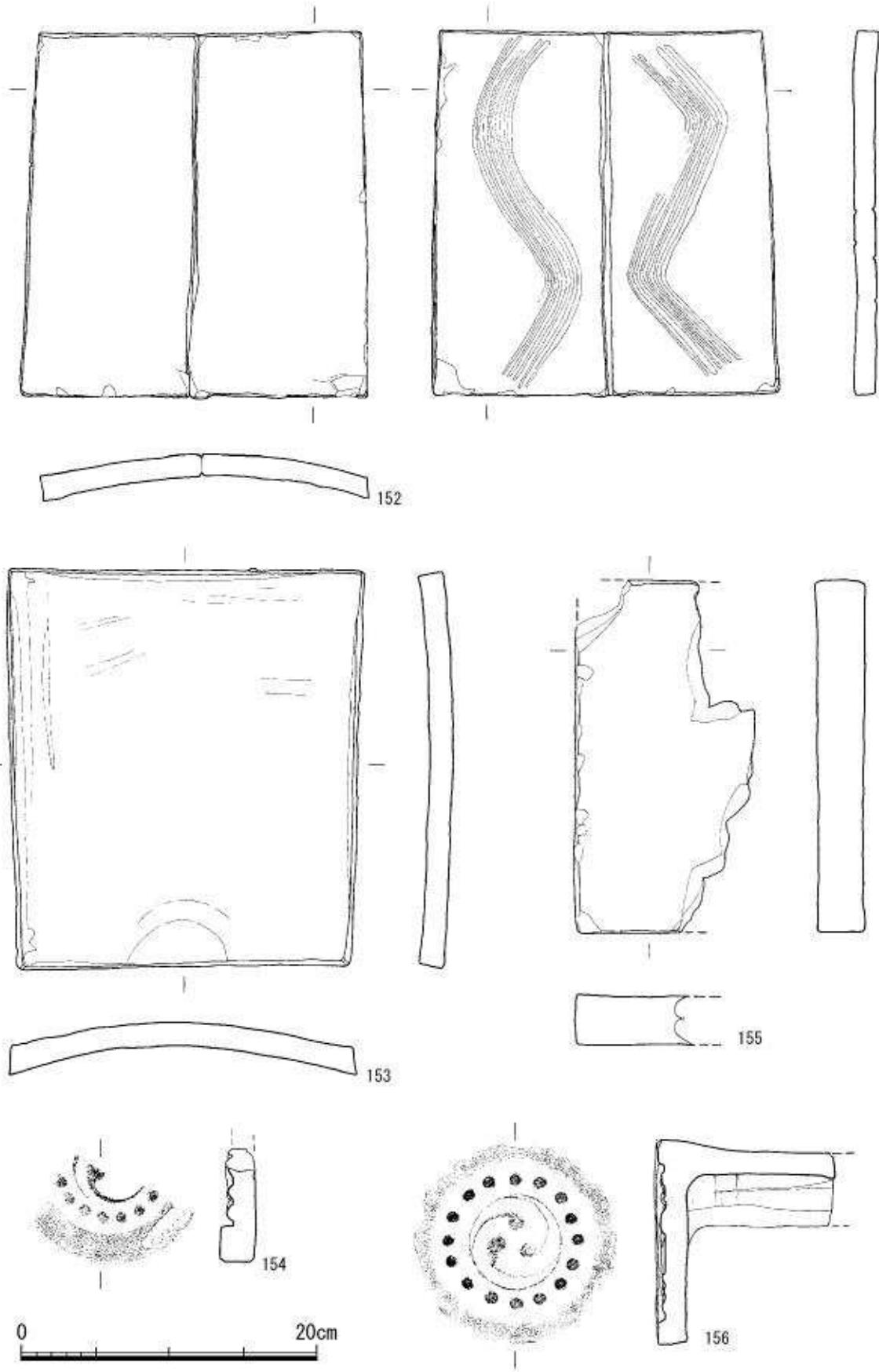
珍しいものとしては、波佐見焼の碗底部周辺を細かく削って、平たくしたもの（第23図71）があって、子供遊びのケンバ玉と推定された。同様なものは、瓦片の周囲を磨って丸くしたもの（図版20）も出土している。

土坑16からは、瓦も多数出土した。三つ鱗文軒丸瓦（第28図126）は、藩主の御殿に葺かれていた瓦なのである。巴文軒丸瓦（第28図127・128）、唐草文軒平瓦（第28図129～133）、唐草文軒桟瓦（第28図134）、小菊（第28図135）などに混じって、「○」の刻印のある平瓦（第28図136、図版20）や道具瓦（図版20 148・149）も出土した。また、土製鋳型や砥石（図版16）も出土した。

以上の土坑16出土遺物は、18世紀代のものばかりで、一括性が高く、恐らく天明2年（1782）の狭山藩焼失の際の遺物と考えられる。なお、土坑16の東半部は、大阪狭山市教育委員会による平成11年度の発掘調査で「廃棄物の土坑」として検出・報告されている。



第28図 2区4面土坑16 (126~136)、3面瓦積 (137~143)、溝18 (144~146) 出土瓦実測図



第29図 2区3面溝18（152・153）、1面ピット21（154）、包含層（155・156）出土瓦実測図

遺物番号	地区	新造横番号		旧造横番号	種別	器種	時期	法量(cm)		摘要	図	図版
		遺構面	造構・層位					高さ	幅			
1	1区	2面	ピット6	ピット7	磁器	碗		5.2	10.4	波佐見焼	16	14
2	1区	2面	ピット7	ピット10	磁器	小型高杯		9.0	5.9	波佐見焼	16	14
3	1区	2面	ピット8	ピット9	磁器	碗		(2.9)	(3.6)	瀬戸焼	16	
4	1区	2面	ピット9	ピット13	磁器	碗		5.1	11.6	肥前京焼系	16	14
5	1区	2面	ピット10	ピット16	陶器	鉢		9.1	24.0	唐津三島手	16	14
6	1区	2面	ピット10	ピット16	土師器	焼塩壺		(5.4)	(6.8)	堺か泉州か?	16	
7	1区	2面	ピット11	ピット24	陶器	すり鉢		(5.4)	—	丹波	16	
8	1区	2面	ピット12	ピット23	土師器	コシロ		(8.2)	26.3	雪平置き用	16	
9	1区	2面	ピット13	ピット22	陶器	水桶		12.5	18.3	堺すり鉢	16	14
10	1区	2面	ピット10	ピット16	陶器	すり鉢		13.2	37.2	堺すり鉢	16	14
11	1区	2面	溝5	溝1	陶器	すり鉢		(11.9)	32.8	堺すり鉢	16	
12	1区	2面	溝5	溝1	土師器	焼塩壺		(4.7)	(5.5)	大阪市内	16	14
13	1区	2面	溝5	石列	磁器	皿		3.4	10.0	青磁染付	17	15
14	1区	2面	溝5	石列	磁器	皿		3.2	10.0	青磁染付	17	
15	1区	2面	溝5	石列	陶器	抹茶茶碗		6.5	8.4	江永焼	17	14
16	1区		包含層	包含層	陶器	皿		(2.5)	(18.3)	肥前京焼系、「木下筋」刻印	17	15
17	1区		包含層	包含層	磁器	筒茶碗?	17世紀	(5.5)	8.0	景德鎮	17	15
18	1区		包含層	包含層	磁器	盤		(1.6)	(14.4)	漳州窯五彩盤	17	15
19	1区		包含層	包含層	陶器	すり鉢		(4.4)	—	備前	17	
20	1区		包含層	包含層	土師器	ほうらく		(6.3)	31.4		17	
21	1区		包含層	包含層	土師器	鉢		(5.0)	—	刻印入り	17	15
22	1区	1面	土坑15	土坑1	磁器	碗		5.8	9.8	波佐見焼	17	15
23	1区	1面	土坑15	土坑1	磁器	雪平鍋		(1.8)	(8.8)		17	15
24	1区		擾乱中	擾乱中	陶器	古瓶		2.2	2.3	寛永通宝	18	16
25	1区	1面	土坑15	土坑1	鉄器	鍊		4.8	(9.5)		16	
26	1区		検出中	検出中	石器	規		(11.3)	7.9	粘板岩(灰緑色)	16	
27	1区		側溝	側溝	石器	石盤		8.1	6.0	粘板岩(黒色), 方眼入り	16	
28	2区	4面	土坑16	土坑1	土製品	鋳型		(3.4)	(2.6)		16	
29	2区	4面	土坑16	土坑1	土製品	鋳型		(4.5)	(3.0)		16	
30	2区	4面	土坑16	土坑1	石器	磁石		3.3	(6.1)	凝灰岩, 4面使用	16	
31	1区	2面	溝5	溝1	瓦	易表		13.6	13.0	三つ頭文	19	18
32	1区	2面	溝5	溝1	瓦	軒丸瓦		(10.8)	(9.4)	巴文	19	
33	1区	2面	溝5	溝1	瓦	軒丸瓦		(9.6)	(10.5)	巴文	19	
34	1区	2面	溝5	溝1	瓦	軒平瓦		3.7	(11.6)	唐草文	19	
35	1区	2面	溝5	溝1	瓦	軒平瓦		3.2	(14.2)		19	
36	1区	2面	ピット6	ピット7	瓦	軒丸瓦		(7.2)	13.8	巴文	19	
37	1区	2面	ピット10	ピット16	瓦	軒丸瓦		13.6	(13.0)	巴文	19	18
38	1区	2面	ピット10	ピット16	瓦	軒丸瓦		(7.0)	(13.0)	巴文	19	
39	1区	1面	土坑15	土坑1	瓦	軒平瓦		3.0	(17.0)	唐草文	19	18
40	1区	1面	土坑15	土坑1	瓦	軒柱瓦		5.0	24.6	唐草文	19	18
41	1区	2面	溝5	石列	瓦	軒丸瓦		(4.0)	(7.4)	巴文	19	
42	1区	2面	溝5	石列	瓦	軒丸瓦		(6.6)	(10.5)	巴文	19	
43	1区	2面	溝5	石列	瓦	軒丸瓦		(5.2)	(9.2)	巴文	19	
44	1区	2面	溝5	石列	瓦	軒平瓦		2.8	(12.2)	唐草文	19	
45	1区		検出中	検出中	瓦	軒平瓦		3.5	(10.0)	唐草文	19	
46	1区		擾乱	擾乱	瓦	軒平瓦		3.8	(15.7)	唐草文	19	
47	1区		側溝	側溝	瓦	軒丸瓦		(5.1)	(8.7)	巴文	19	
48	1区	2面	溝5	石列	瓦	廢鐵瓦		39.8	(38.2)	内面に線刻。	20	19
49	1区	2面	溝5	石列	瓦	廢鐵瓦		36.1	(45.7)		20	
50	1区	2面	溝5	石列	瓦	廢鐵瓦		39.7	(44.3)		20	
51	1区	2面	溝5	石列	瓦	廢鐵瓦		39.8	(41.8)		21	
52	1区	2面	溝5・土坑15	溝1・土坑1	瓦	廢鐵瓦		(22.5)	(20.6)		21	
53	1区	2面	溝5	石列・溝1	瓦	廢鐵瓦		43.0	84.2	厚さ3cm、重量19.56kg。	21	19
54	1区	2面	溝5	溝1	瓦	丸瓦		(18.5)	13.4	玉縁式、「櫻谷伝兵衛」印	22	18

第1表 遺物観察表①

第3章 調査の成果

遺物番号	地区	新造横番号		旧造横番号	種別	器種	時期	法量(cm)		摘要	図	図版
		遺構面	造構・層位					高さ	幅			
55	1区	2面	溝5	溝1	瓦	平瓦		(3.6)	1.8	「堀谷伝兵衛」印	22	18
56	1区	2面	溝5	溝1	瓦	平瓦		(1.9)	2.0	「堀谷伝口口」印	22	18
57	1区	1面	土坑14	疊入り土坑	瓦	平瓦		(11.1)	2.2	「口谷伝兵衛」印	22	18
58	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		6.0	10.7	波佐見焼	23	
59	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		6.2	9.6	波佐見焼	23	
60	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		5.8	9.7	波佐見焼	23	
61	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		5.3	10.2	波佐見焼	23	
62	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		5.5	10.4	波佐見焼	23	
63	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		5.5	9.9	波佐見焼	23	
64	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		4.9	10.2	波佐見焼	23	
65	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗		5.1	10.7	波佐見焼	23	
66	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗	18世紀中頃	5.0	10.8	波佐見焼	23	
67	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	蓋		2.8	9.0	波佐見焼	23	
68	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	蓋	18世紀前半	3.2	11.0	波佐見焼	23	
69	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	丸皿	18世紀	3.2	13.0	波佐見焼	23	
70	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	小鉢		8.0	14.1	波佐見焼	23	
71	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	ケンバ玉		5.8	5.4	波佐見焼	23	
72	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	とっくり		(6.8)	(6.0)	波佐見焼	23	
73	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	碗		(3.7)	9.8	肥前京焼系	23	
74	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	碗		5.9	9.2	肥前京焼系	23	
75	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	碗		5.8	11.2	肥前京焼系	23	
76	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	柄付き碗	18世紀	6.0	9.0	肥前京焼系	23	17
77	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器質	碗		5.4	10.0	京焼	23	
78	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	蓋		(2.0)	12.0	京・備楽系	23	
79	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	小皿		(2.7)	(9.7)	蜻足唐草	23	
80	2区	4面	土坑16	土坑1	陶磁器	碗		4.6	7.5	底地不明	23	
81	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	碗		4.9	10.2	江永焼	23	
82	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	皿?		(1.1)	(3.9)	縁割あり。	23	
83	2区	4面	土坑16	土坑1	磁器	碗	15世紀	(4.5)	13.0	竜泉窯。質悪い。	23	
84	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	碗		6.3	10.7	朝日焼。「朝日」印	24	17
85	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	碗		6.3	10.7	朝日焼	24	
86	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	とっくり	18世紀	(9.8)	(10.2)	丹波焼	24	
87	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	とっくり		(7.3)	(14.0)	丹波焼	24	
88	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	鉢		(7.0)	(15.7)	瀬戸灰釉	24	
89	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	鉢	18世紀	(5.0)	24.0	瀬戸灰釉	24	
90	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	大鉢		(8.4)	40.0	三島應津	24	
91	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	燈明皿		1.1	6.5		24	
92	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	燈明皿		1.7	9.6	燐付蓋	24	
93	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦質	火鉢		(5.4)	18.0		24	
94	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦質	七輪?		(4.6)	28.0		24	
95	2区	4面	土坑16	土坑1	陶器	すり鉢		17.9	38.4	堀すり鉢	24	17
96	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	ほうらく		(5.3)	29.0		25	
97	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	ほうらく?		(5.3)	27.6		25	
98	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	火鉢		(17.1)	21.5		25	17
99	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	すのこ		(6.9)	(3.8)		25	
100	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	すのこ		(5.9)	(3.8)		25	
101	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	すのこ		(8.3)	(4.2)		25	
102	2区	4面	土坑16	土坑1	土師器	大鉢		(5.5)	48.0	漢焼	25	
103	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	土師器	ほうらく		(3.8)	32.4		25	
104	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	陶器	すり鉢		(8.3)	30.0	堀すり鉢	25	
105	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	土師器	羽釜	14世紀	(5.1)	(26.8)		25	
106	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	磁器	皿		3.9	13.0	波佐見焼	26	17
107	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	磁器	碗		(2.2)	(7.9)	波佐見焼	26	
108	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	磁器	碗		5.5	11.2	波佐見焼	26	

第1表 遺物観察表②

遺物番号	地区	新造横番号		旧造横番号	種別	器種	時期	法量(cm)		摘要	図	図版
		遺構面	造構・層位					高さ	幅			
109	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	磁器	小型高环		(3.1)	(4.3)	佔火器?	26	
110	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	陶器	鉢		(7.2)	24.0	三島唐津	26	
111	2区	4面	土坑16(大手筋下層)	大手筋下層	陶器	鉢		(2.9)	26.0		26	
112	2区	3面	瓦積	瓦積	土師器	焼塙壺		1.6	7.4	蓋	26	
113	2区	3面	瓦積	瓦積	陶器	すり鉢		(6.3)	25.4	堺すり鉢	26	
114	2区	3面	溝18	溝3	磁器	碗		5.2	9.5	波佐見焼	26	
115	2区	3面	溝18	溝3	陶器	すり鉢		(7.2)	21.0	堺すり鉢	26	
116	2区		包含層	包含層(黄褐色土)	陶器	鉢		(9.4)	20.8	三島唐津	26	
117	2区		包含層	包含層(淡茶褐色土)	陶器	かえる		(3.4)	8.5	信楽	26	
118	2区		包含層	包含層(黄褐色土)	磁器	盤		(1.0)	(11.4)	伊万里角福	26	
119	2区	1面	落込み22	落込み1	陶器	茶碗		(4.9)	7.6	瀬戸經平	26	
120	2区	1面	落込み22	落込み1	陶器	鉢		(8.4)	31.0	三島唐津	26	
121	2区	1面	落込み22	落込み1	土師器	人形		(1.9)	(6.2)		26	
122	2区	1面	落込み22	落込み1	磁器	鉢	明治	(4.4)	17.2	瀬戸	26	
123	2区	1面	ピット20	ピット8	土師器	火鉢		14.2	18.7		27	17
124	2区	1面	ピット20	ピット8	土師器	小皿		1.5	8.8		27	
125	2区	2面	土坑		瓦質	火鉢		17.8	49.8	角形。4脚	27	17
126	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒丸瓦		13.4	13.2	三つ脚文	28	20
127	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒丸瓦		13.2	13.2	巴文	28	20
128	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒丸瓦		(8.0)	(11.8)	巴文	28	
129	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒平瓦		3.6	(12.2)	唐草文	28	
130	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒平瓦		3.8	(15.0)	唐草文	28	20
131	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒平瓦		3.0	(13.2)	唐草文	28	
132	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒平瓦		3.6	(10.4)	唐草文	28	20
133	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒平瓦		3.6	(13.8)	唐草文	28	
134	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	軒桂瓦		4.1	(10.8)	唐草文	28	
135	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	小菊		(2.5)	(5.0)		28	20
136	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	平瓦		2.0	(5.7)	「O」印	28	20
137	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒丸瓦		14.0	13.8	巴文	28	21
138	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒丸瓦		(8.7)	12.2	巴文	28	
139	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒平瓦		(2.6)	(7.0)	唐草文	28	
140	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒平瓦		3.3	(12.8)	唐草文	28	21
141	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒桂瓦		4.6	(22.1)	唐草文	28	21
142	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒平瓦		3.6	(12.0)	唐草文	28	
143	2区	3面	瓦積	瓦積	瓦	軒平瓦		3.6	(9.5)	唐草文	28	
144	2区	3面	溝18	溝3	瓦	軒丸瓦		13.0	(12.7)	巴文	28	21
145	2区	3面	溝18	溝3	瓦	軒平瓦		3.0	(14.2)	唐草文	28	
146	2区	3面	溝18	溝3	瓦	軒平瓦		2.8	(13.8)	唐草文	28	
147	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	平瓦		2.0	(5.8)	「O」印		20
148	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	道具瓦		4.5	10.3	玉縁。釘穴あり。		20
149	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	道具瓦		3.1	7.6	上下端が削り落とされる。		20
150	2区	4面	土坑16	土坑1	瓦	けんば瓦		4.2	4.5	周囲が磨り落とされる。		20
151	1区	1面	土坑16	土坑1	瓦	平瓦軒用品		4.5	5.6	三つ脚文の蓋呂が、厚さ1.5cm。		20
152	2区	3面	溝18	溝3	瓦	熨斗瓦		24.6	25.3	S字状の文様。溝あり。	29	21
153	2区	3面	溝18	溝3	瓦	平瓦		28.6	24.0	厚さ1.6cm。1.9kg	29	21
154	2区	1面	ピット21	ピット10	瓦	軒丸瓦		(7.6)	(11.0)	巴文	29	
155	2区		包含層	包含層(黄褐色土)	瓦	熨斗瓦?		23.6	(12.0)	厚さ3.2cm。	29	
156	2区		包含層	包含層(黄褐色土)	瓦	軒丸瓦		13.8	13.4	巴文	29	21
157	2区	3面	溝18	溝3	瓦	熨斗瓦		25.3	11.8	0.86kg		21
158	2区	3面	溝18	溝3	瓦	平瓦		26.8	24.4	1.82kg		21
159	2区	3面	溝18	溝3	瓦	平瓦		26.4	24.0	1.82kg		21
160	2区	3面	溝18	溝3	瓦	平瓦		26.9	24.1	1.98kg		21
161	2区	3面	溝18	溝3	瓦	平瓦		26.9	24.1	2.0kg		21
162	2区	3面	溝18	溝3	瓦	平瓦		26.5	24.0	1.84kg		21

第1表 遺物観察表③

第4章 まとめ

今回の調査は、小面積であったにもかかわらず大きな成果をあげることができた。主要な成果は以下の3点である。

- ① 狹山藩陣屋跡の変遷の一部を把握することができた。
- ② 陣屋の区画について「狭山藩陣屋上屋敷図」との異同について整理できた。
- ③ 出土した遺物から陣屋の中心部に存在した建物の姿を想像することができた。

(1) 陣屋跡の変遷

2区の最下層で検出した土坑16は、天明2年（1782）の大火によって生じた残骸を廃棄した遺構である。今回の調査では、狭山藩陣屋跡が大火の後に、復興した状況を検出することができた。1区、2区で検出された柵列は、復興の過程で暫定的に設置されたものである。そして本格的に再建されたのが、1区（舟越仲家屋敷）で検出された石列をともなう水路である。屋敷側の石列の上部には塀が構築されていたのは文献史料によっても確認できる。

明治維新を迎え、狭山藩が廃止され陣屋の機能が失われる。それにともなって陣屋に関わる多くの施設が廃棄、解体されたようである。その残骸が1区の溝5や2区の溝18の出土遺物である。1区・2区ともに大手筋の一部が廃止され、水路が埋められて屋敷の敷地と一体化していく。

このような過程を今回の調査で明らかにすることができた。

(2) 陣屋の区画

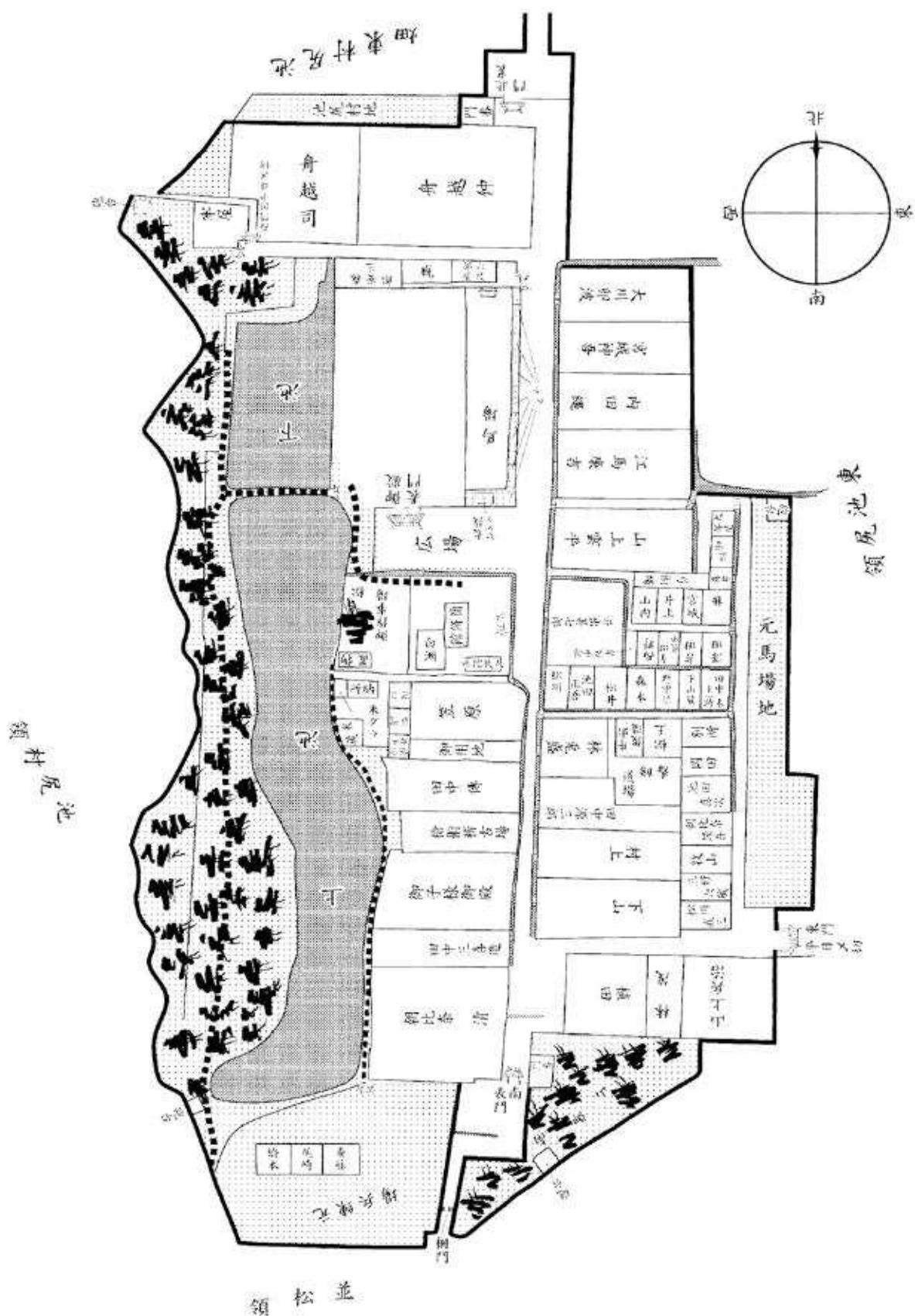
今回の調査では陣屋跡の区画の基準となる大手筋の路面と路肩、さらに沿って造られた水路を検出することができた。1区と2区の遺構の形状は異なるが、大手筋の西側の路肩とそれに沿って造られた水路は、ほぼ一直線に検出された。

これを「狭山藩陣屋上屋敷図」と比較すると重大な違いがある。同図は、幕末から明治初期の状況を明治29年（1896）年頃に描いたものとされる。1区が舟越仲家の屋敷地の東端あたり、2区が内郭の北東隅あたりに比定される。

この図では舟越仲家屋敷が大手筋に面したところに水路は描かれていない。しかし調査の結果、ここには大手筋に相応しい石列で護岸した水路が検出された。さらに図では舟越仲家の屋敷地は、南隣する内郭の外郭線よりわずかに東よりに大手筋との境界があるように描かれている。今回の調査で検出した遺構が18世紀終わり頃の大火後に再建されたものであり、その姿は大手筋と水路が廃絶されるまで継続していた。

このことから考えると、図に描かれた舟越仲家屋敷地の大手筋に面した場所は、大手筋と水路がすでに失われた時点、図が描かれた明治29年頃の姿をとどめているのであろうか。

2区を「狭山藩陣屋上屋敷図」に当てはめると、内郭の馬場や厩などにつながる細い東西の通路が大手筋と交わる場所に造られた門辺りの地点に比定される。ここでは図に描かれた施設を検出することはできなかった。しかし側溝の南端では溝底に完形の平瓦や拳大の石が敷き詰められたように出土してい



第30図 「狭山藩陣屋上屋敷図」（書き起こし）

る。図に描かれた施設と何らかの関係がある可能性がある。

今回の調査の成果と「狭山藩陣屋上屋敷図」から読み取れる情報に細部においてではあるが差異が認められた。狭山藩が廃止され陣屋が機能を失って30年後に描かれたという限界があるのであろうか。今後も陣屋跡の調査にあたって留意すべき点である。

(3) 内郭付近の巨大な建築物

1区で検出された大手筋に沿って造られた水路（溝5）からは大量の瓦が出土している。大部分が平瓦、丸瓦の破片であるが、軒瓦も含まれている。基本的には巴文の軒丸瓦に唐草文の軒平瓦のセットである。また唐草文の棟瓦も散見される。

その中で特記せねばならないのが北条氏の家紋である三つ鱗文の鳥食である。1区は舟越仲家の屋敷地に当たる。舟越家は初代藩主の正室を出し、江戸家老を務めたこともある家筋である。しかし北条氏の一門ではなく、その屋敷の建物に三つ鱗の文様は相応しくない。やはり南隣する内郭の藩主の居館あたりのものと想定するのが妥当であろう。

またここから棟にのる雁振瓦と推定される幅80cm、長さ40cmの巨大な瓦が出土している。また、詳細な出土位置は不明であるが、大阪狭山市教育委員会は幅60cm、長さ40cmを測る同様な瓦を所蔵している。前者は大棟の、後者は下り棟の雁振瓦であると考えられる。しかしこのような巨大な瓦を屋根に使用する建造物は、柱も柱組も巨大なものが想定される。寺院などの施設以外では一般的には建設されないという。

このような建物が狭山藩の陣屋の中心施設であった可能性が想定される。小田原北条氏の末裔であるという歴史に対する誇りが、三つ鱗文の瓦を飾る巨大な殿舎を建設させたのであろうか。

今回の調査ではコンテナ189箱の遺物が出土したが、その大部分は瓦類である。狭山藩陣屋にかかる絵図や文献史料によると、陣屋内に設けられた藩士の屋敷の建物などに瓦の使用の率が低いという。今回の調査区が藩主御殿や上級藩士の屋敷の周辺であったため瓦類の出土量が多いと考えられる。

これまで大阪府教育委員会、大阪狭山市教育委員会によって狭山藩陣屋跡の調査が行われている。調査地点ごとの瓦類の出土量を比較することで、陣屋内における瓦葺の家屋の分布の傾向を把握できる可能性がある、今後の課題である。

〔主な参考文献〕

『府道河内長野美原線歩道工事にともなう狭山藩陣屋跡発掘調査概要報告書』・『 同 II』

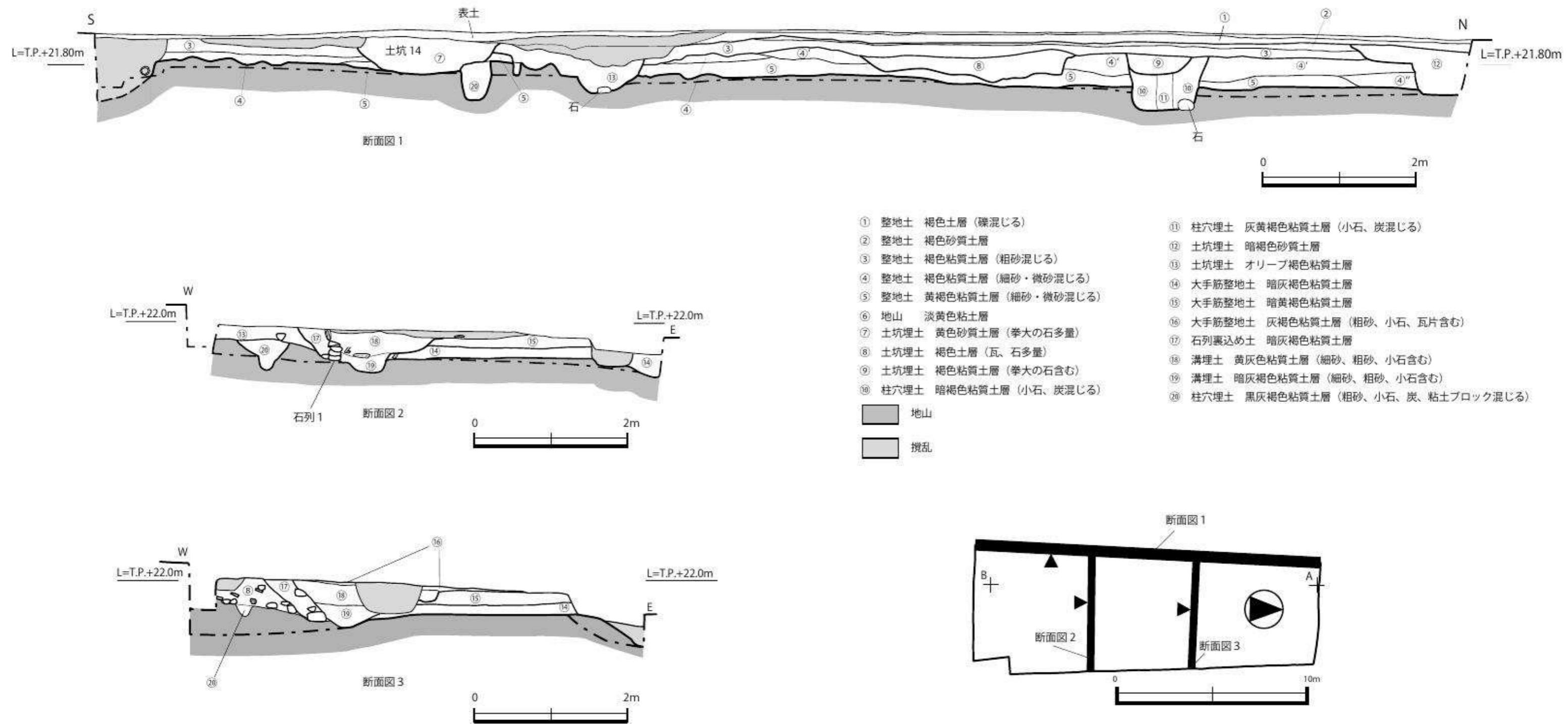
（大阪狭山市教育委員会 1999・2000年）

吉井克信「北条氏狭山藩陣屋跡」（『見学会 狹山池の歴史を訪ねて』（レジュメ）

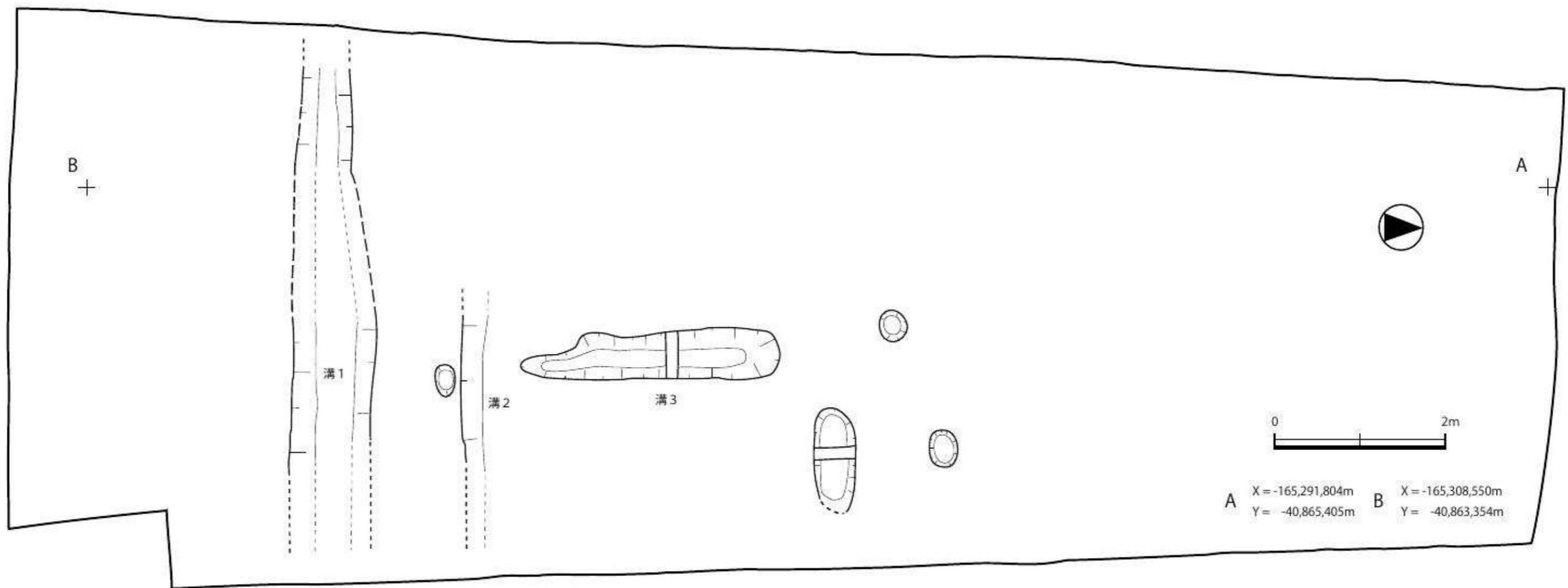
河内の郷土文化サークルセンター 2011年）

『狭山藩陣屋跡』（大阪府埋蔵文化財調査報告2011-7）（大阪府教育委員会 2012年）

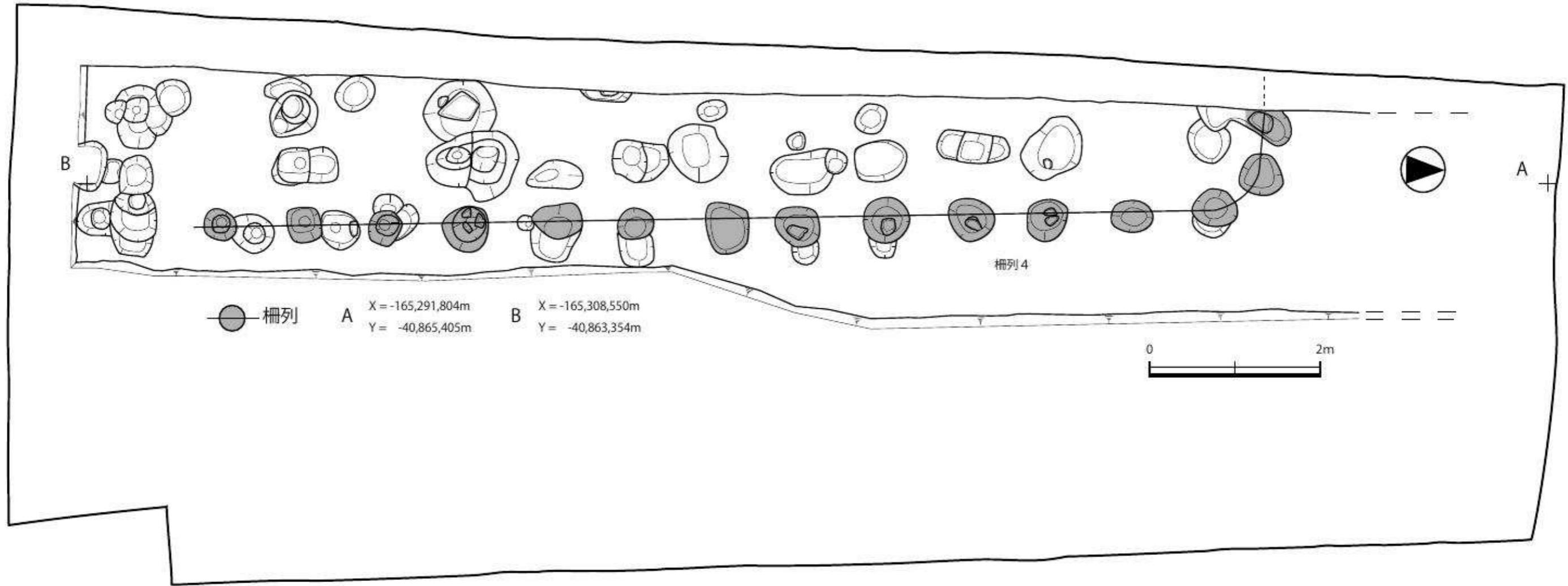
『大阪狭山市史』第1巻（本文編 通史）（大阪狭山市役所 2014年）



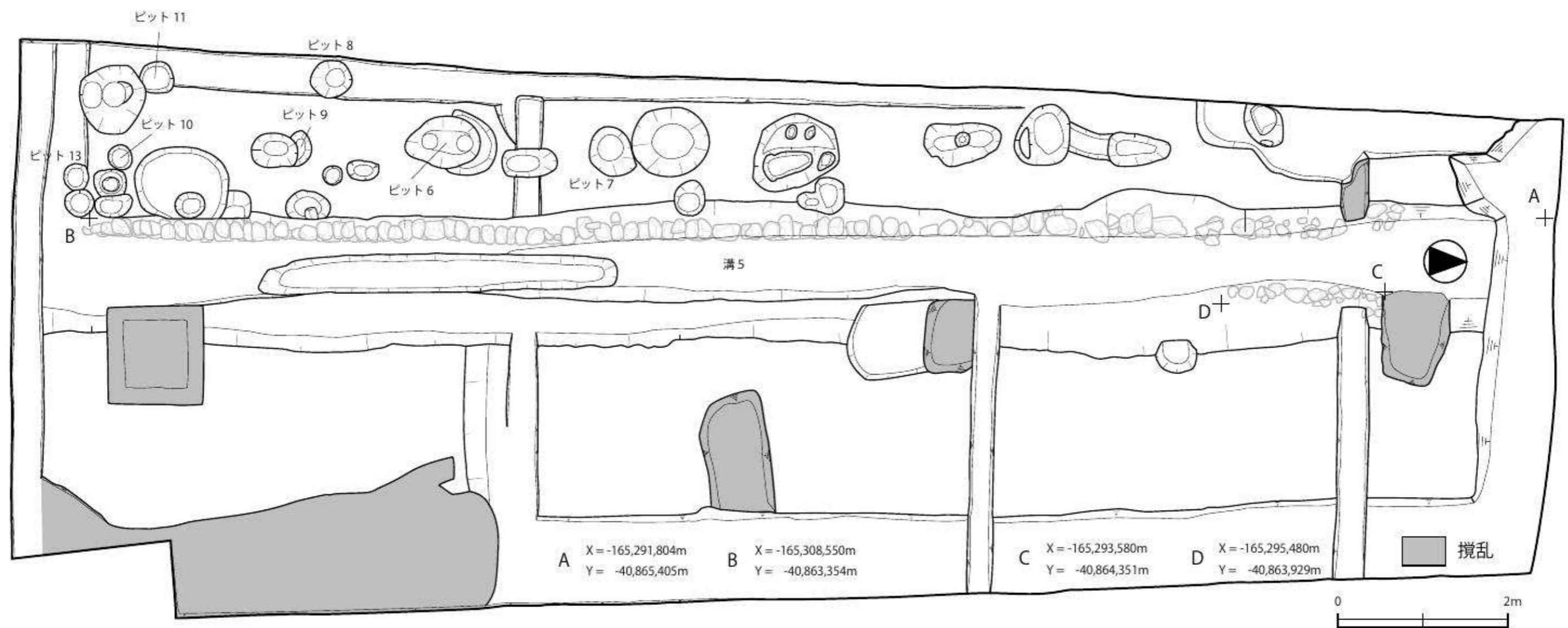
第4図 1区断面図



第5図 1区4面平面図



第6図 1区3面平面図

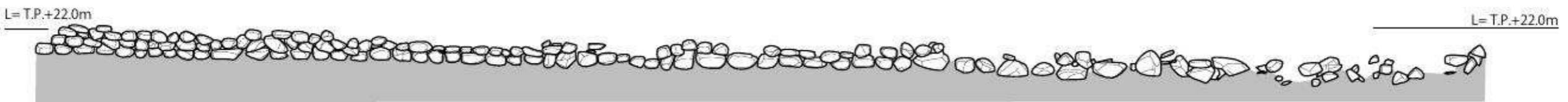


第7図 1区2面平面図

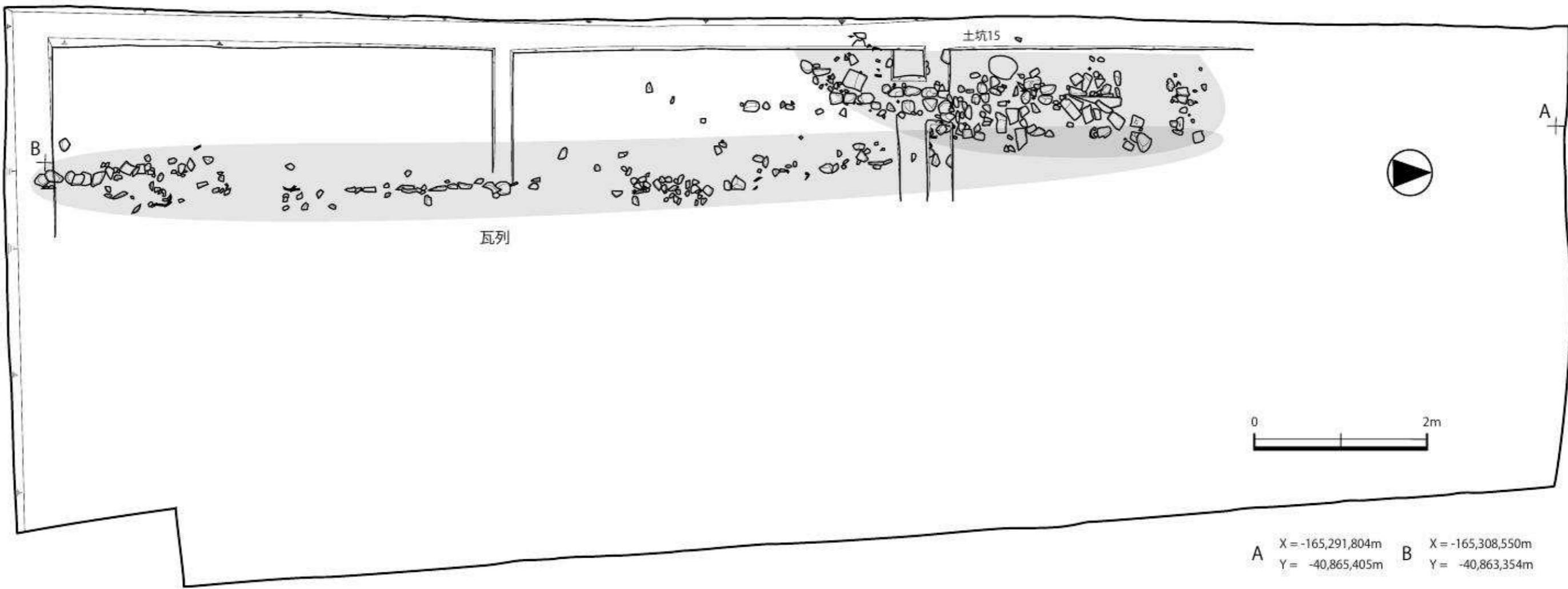
石列 平面図



石列 側面図

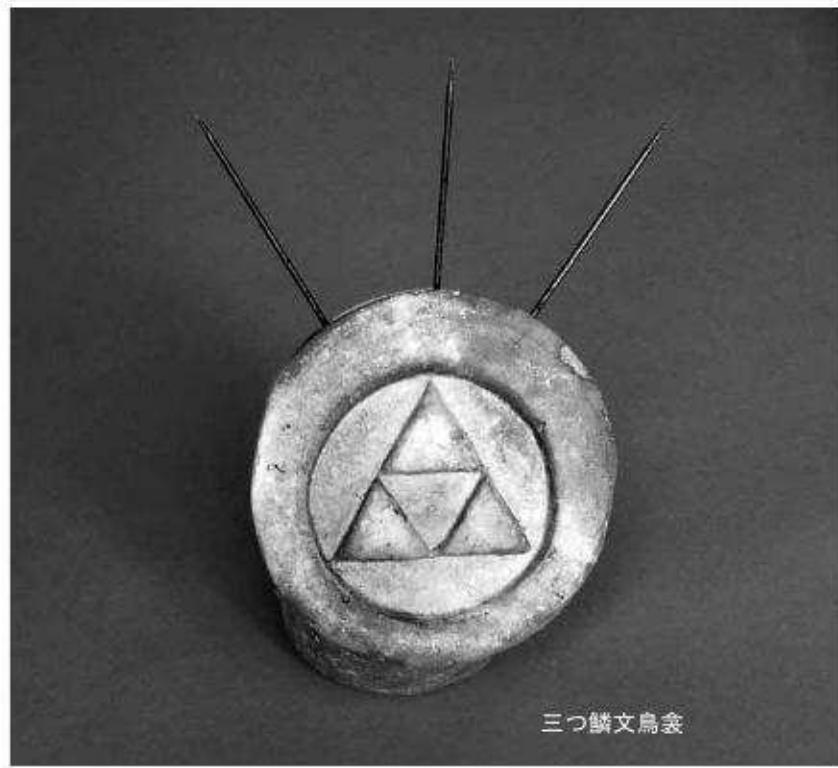


第8図 1区2面溝5石列平面図・側面図



第9図 1区1面平面図

図 版



三つ鱗文鳥衾



a. 1区2面全景(北東から)



b. 1区2面全景(北から)

図版2
1区・2区遺構



a. 1区2面石列(溝5)検出状況(南から)



b. 2区3面全景(手前。奥は1区2面)(南から)

図版
3
2区遺構



a. 2区3面全景(南西から)



b. 2区3面瓦積検出状況(北西から)

図版
4
1区遺構

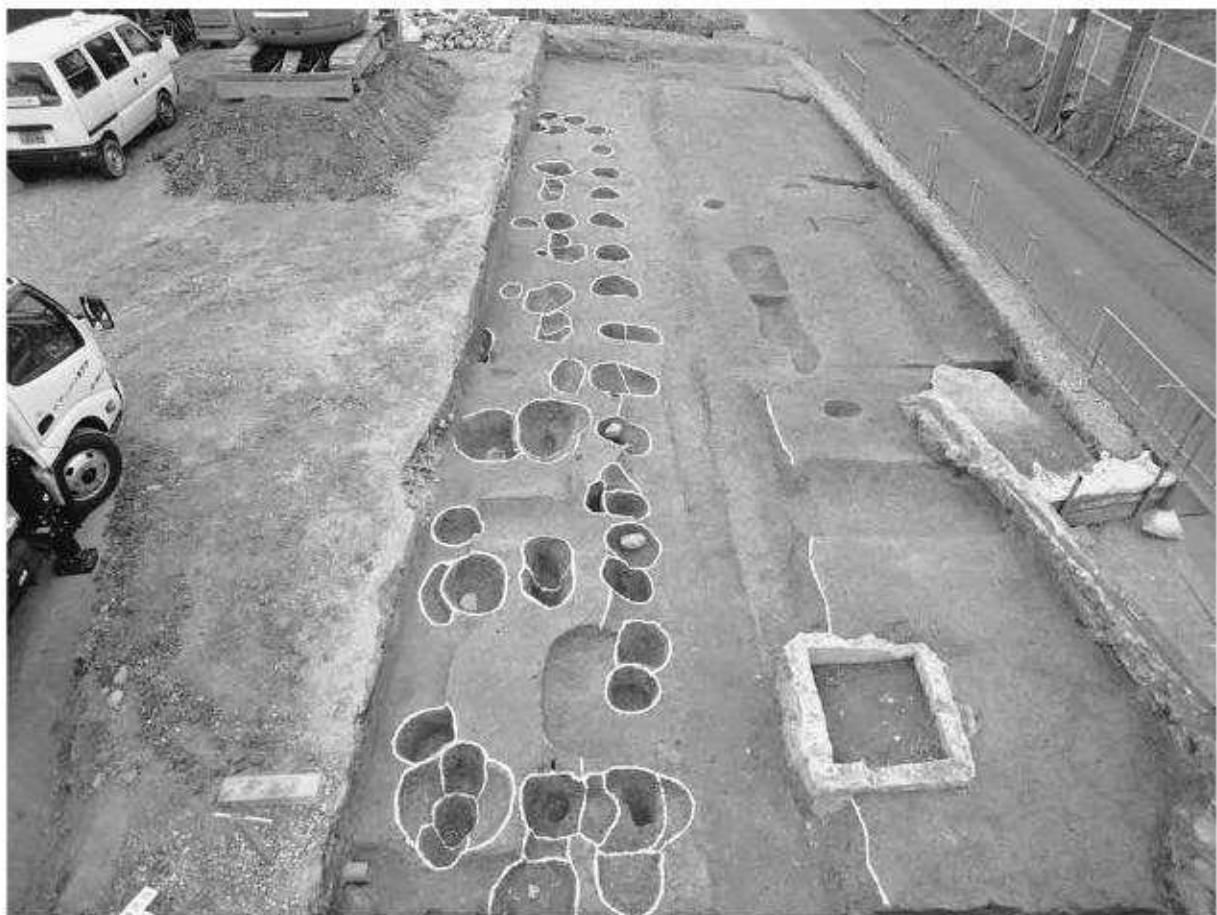


a. 1区4面全景(北から)



b. 1区4面全景(西から)

図版 5
1区遺構

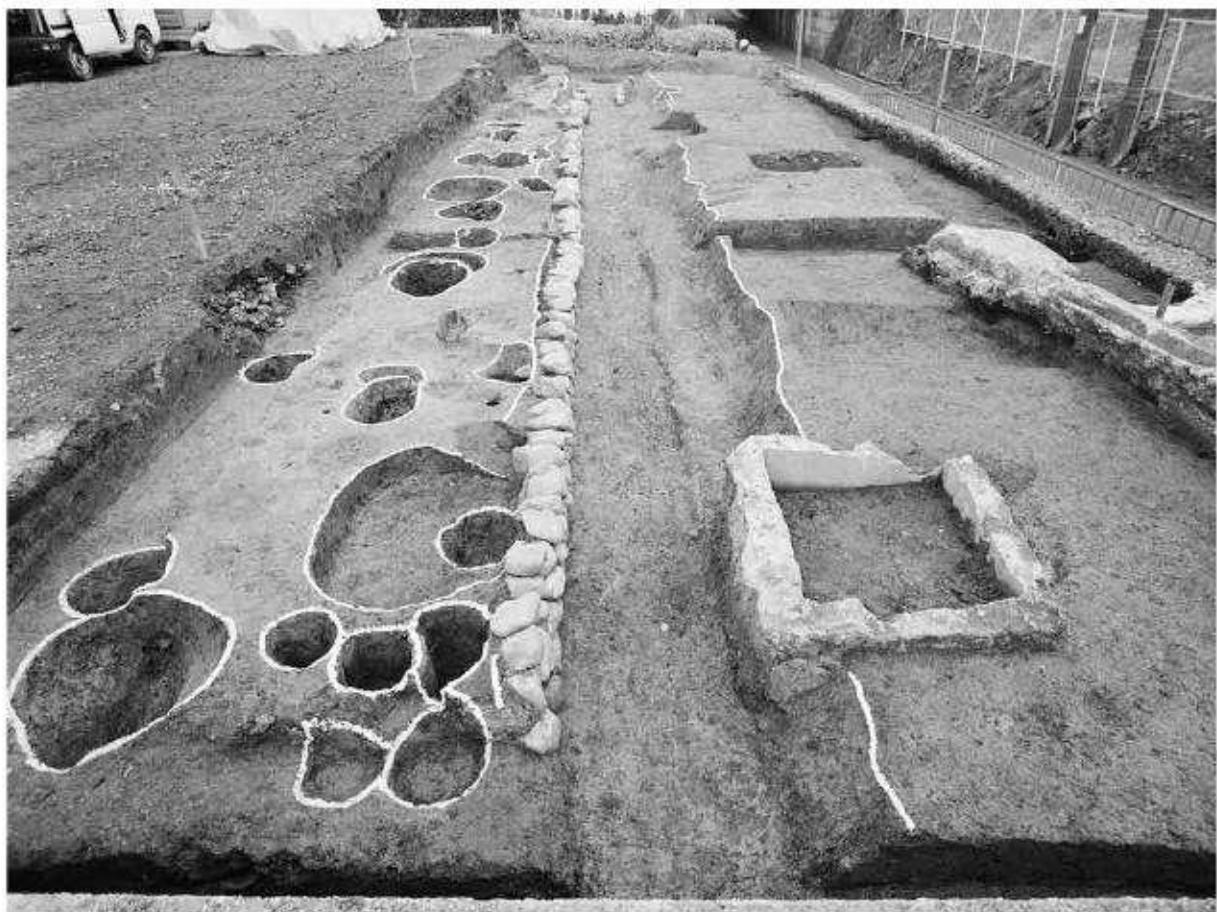


a. 1区3面全景(南から)

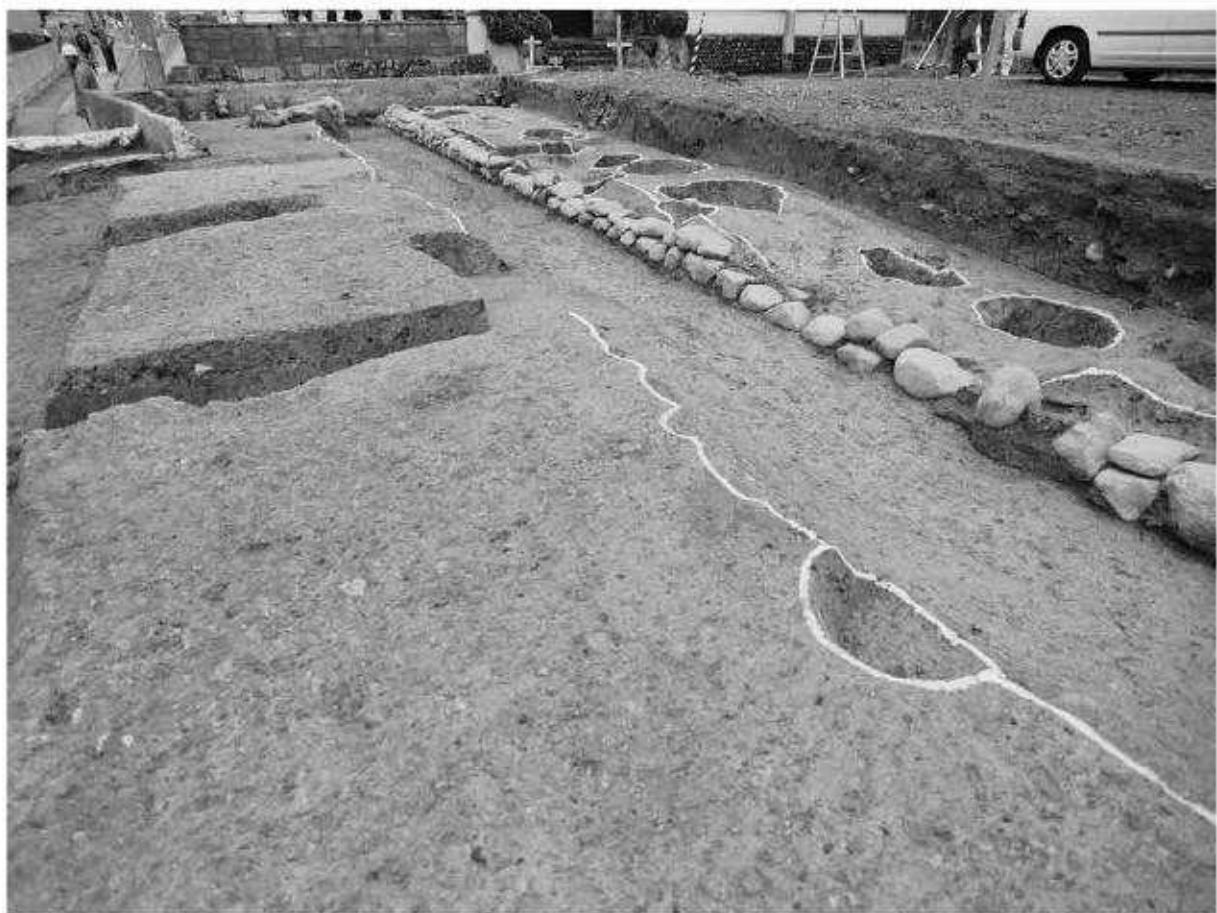


b. 1区3面全景(北から)

図版 6
1区遺構



a. 1区2面全景(南から)



b. 1区2面全景(北東から)



a. 1区2面石列(溝5)南端部(北東から)

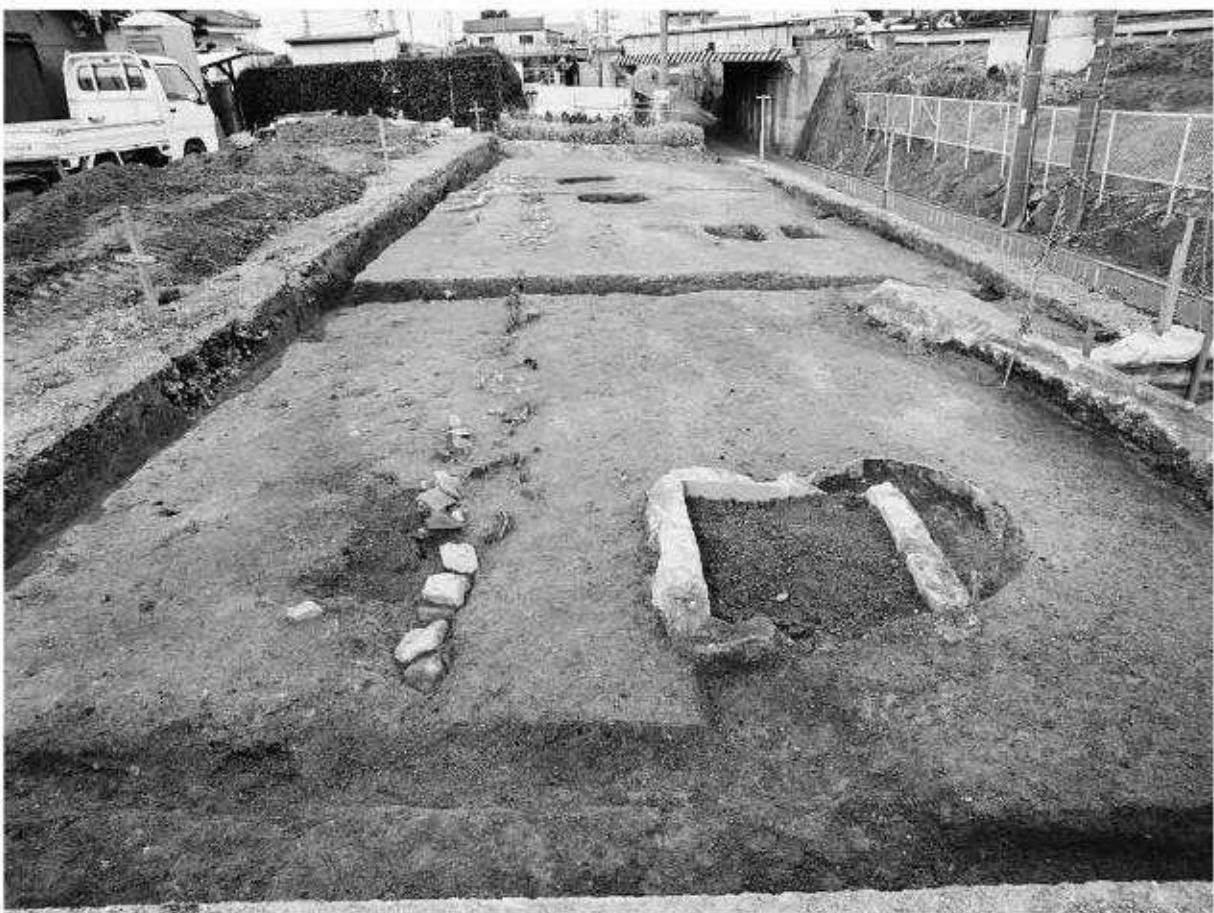


b. 1区2面石列(溝5)北端部(東から)

図版 8
1区遺構



a. 1区1面土坑15遺物出土状況(北から)



b. 1区1面全景(南から)

図版 9
2区遺構



a. 2区4面全景(南から)



b. 2区4面全景(北から)



a. 2区4面土坑16北半部(南西から)



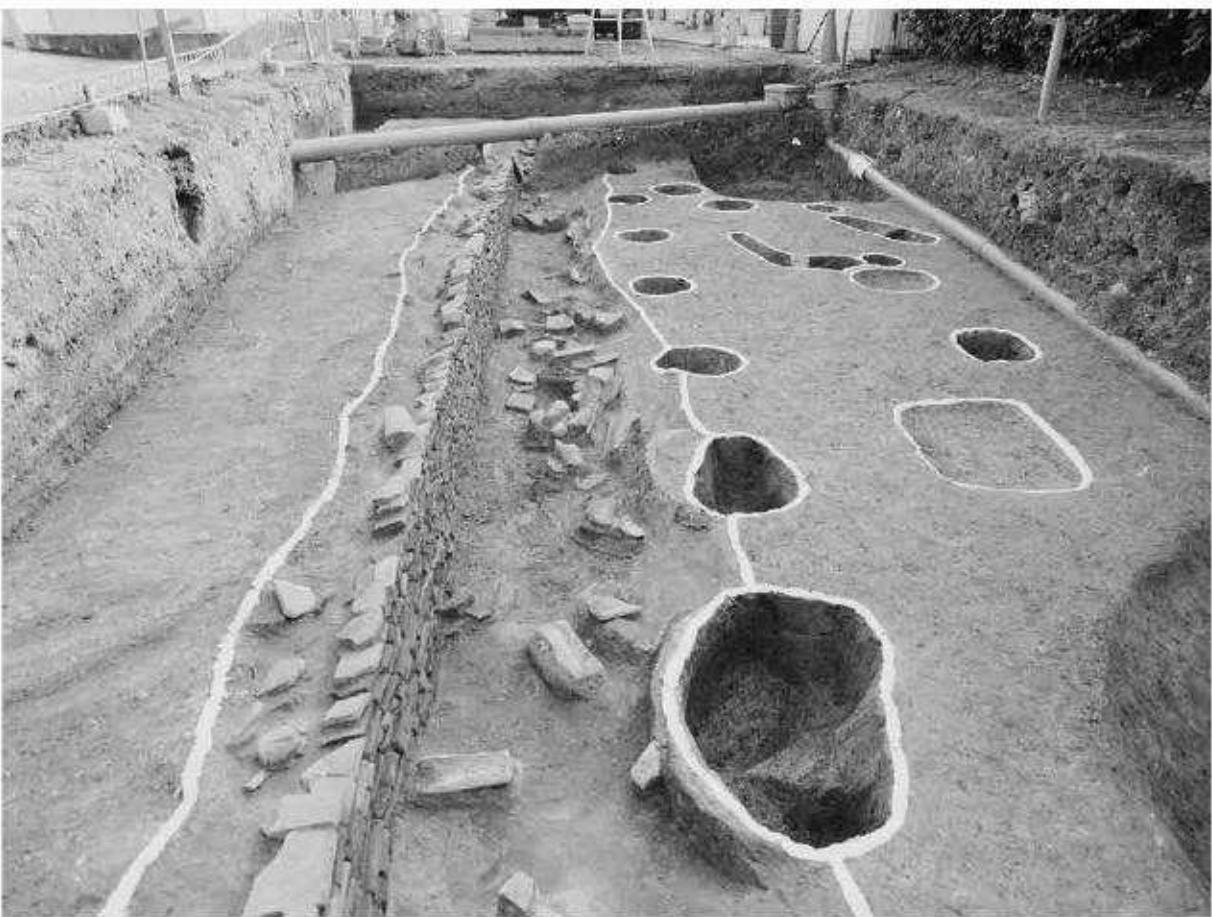
b. 2区3面瓦積断面(南から)



a. 2区3面瓦積内軒棧瓦出土状況(西から)



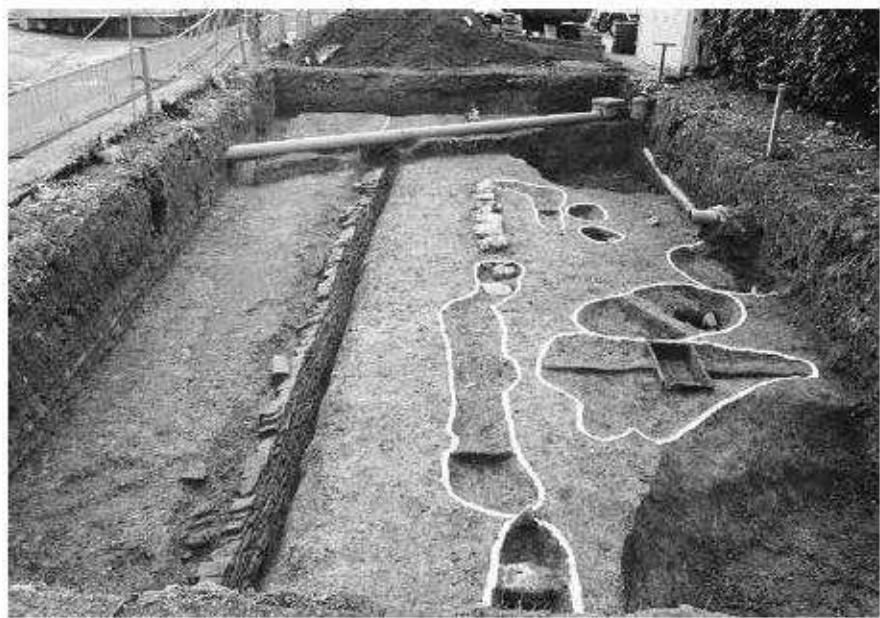
b. 2区3面瓦積内軒棧瓦出土状況(西から)



a. 2区3面溝18遺物出土状況(北から)



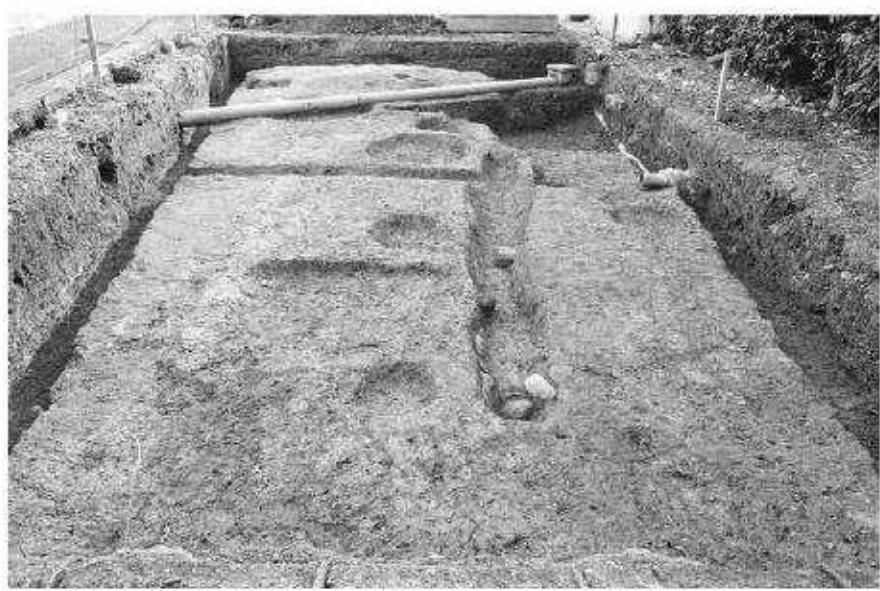
b. 2区3面溝18遺物出土状況(南から)



a. 2区2面全景(北から)



a. 2区2面瓦質角形火鉢出土状況(東から)



a. 2区1面全景(北から)



a. 2面ピット6 波佐見焼碗



b. 2面ピット7 波佐見焼小型高杯



c. 2面ピット9 肥前京焼系鉢



d. 2面ピット10 唐津三島手鉢



e. 2面ピット13 堀すり鉢水指



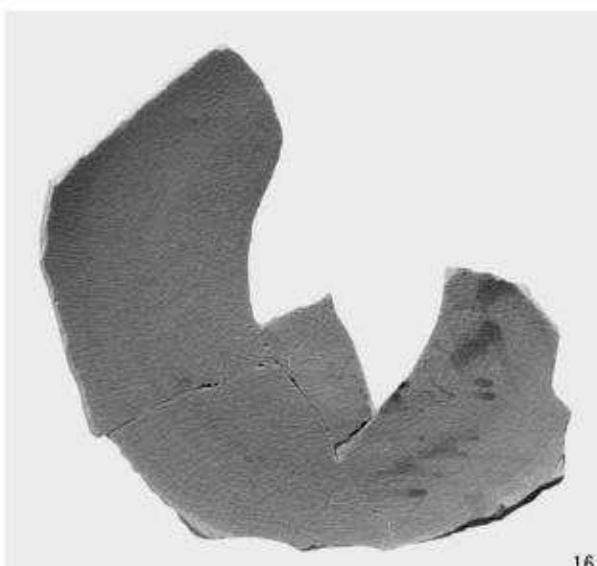
f. 2面ピット10 堀すり鉢



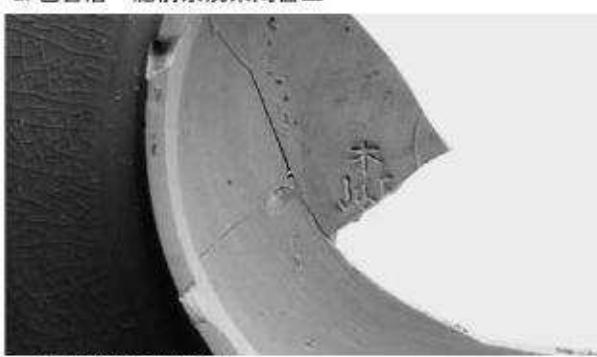
g. 2面溝5 江永焼抹茶茶碗



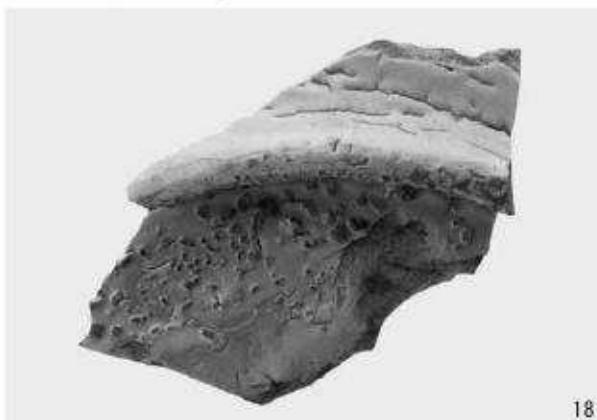
h. 2面溝5 燒塩壺



a. 包含層 肥前京焼系陶器皿



b. 同上刻印「木下弥」



c. 包含層 漳州窯五彩盤



d. 包含層 景德鎮筒茶碗



e. 2面溝5 青磁染付皿



f. 包含層 刻印入り土師器鉢



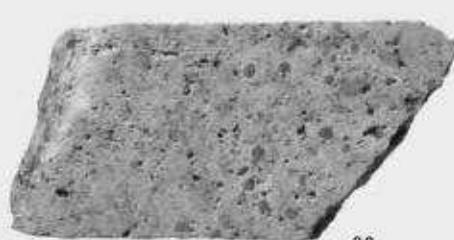
g. 1面土坑15 波佐見焼碗



h. 1面土坑15 雪平鍋



a. 1区1面 寛永通宝、鉄鎌、石硯、石盤



b. 2区4面土坑16 砥石、土製鋳型



84

a. 4面土坑16 朝日焼抹茶茶碗



b. 同上 刻印「朝日」



76

c. 4面土坑16 肥前京焼系柄付き碗



95

d. 4面土坑16 塙すり鉢



98

e. 4面土坑16 こんろ



106

f. 4面土坑16(大手筋下層) 波佐見焼皿



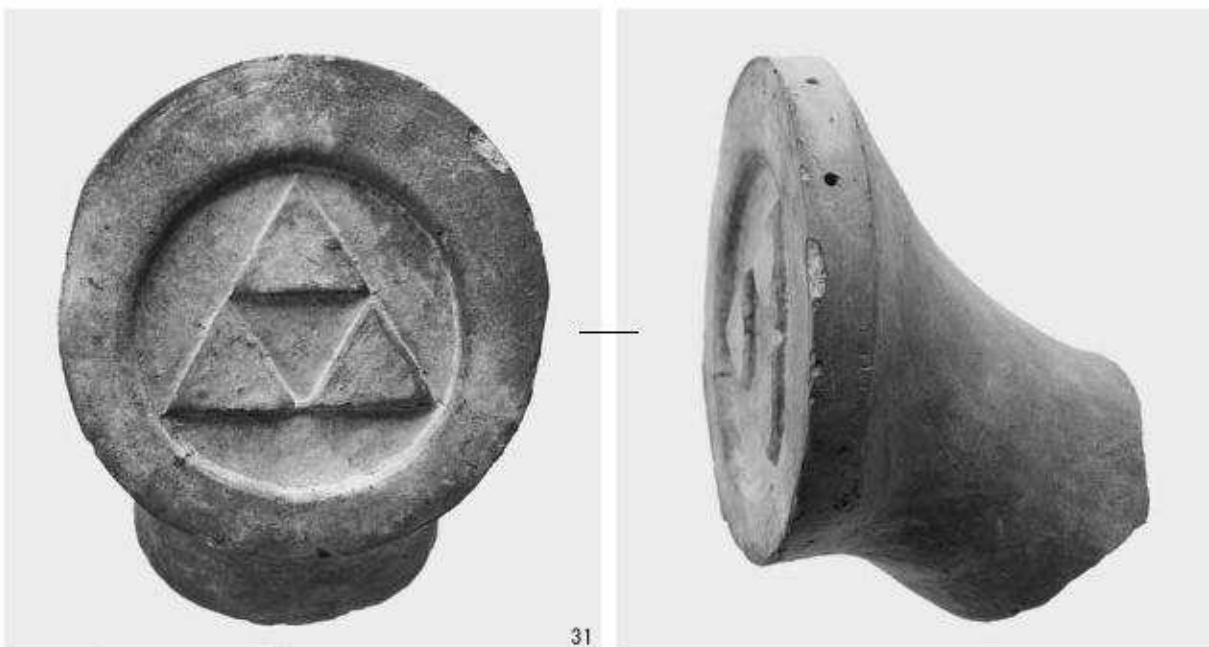
125

g. 2面土坑 瓦質角形火鉢



123

h. 1面ピット20 火鉢



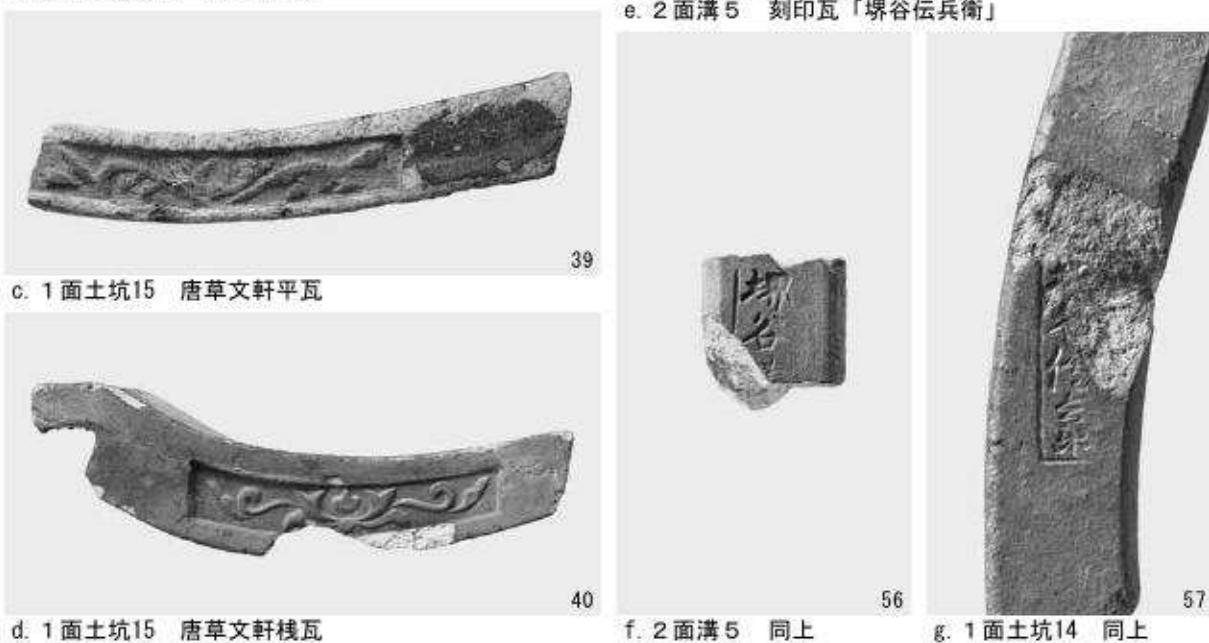
a. 2面溝5 三つ鱗文鳥衾



b. 2面ピット10 巴文軒丸瓦



e. 2面溝5 刻印瓦「堺谷伝兵衛」



c. 1面土坑15 唐草文軒平瓦

d. 1面土坑15 唐草文軒棧瓦

40

f. 2面溝5 同上

56

g. 1面土坑14 同上

57



53

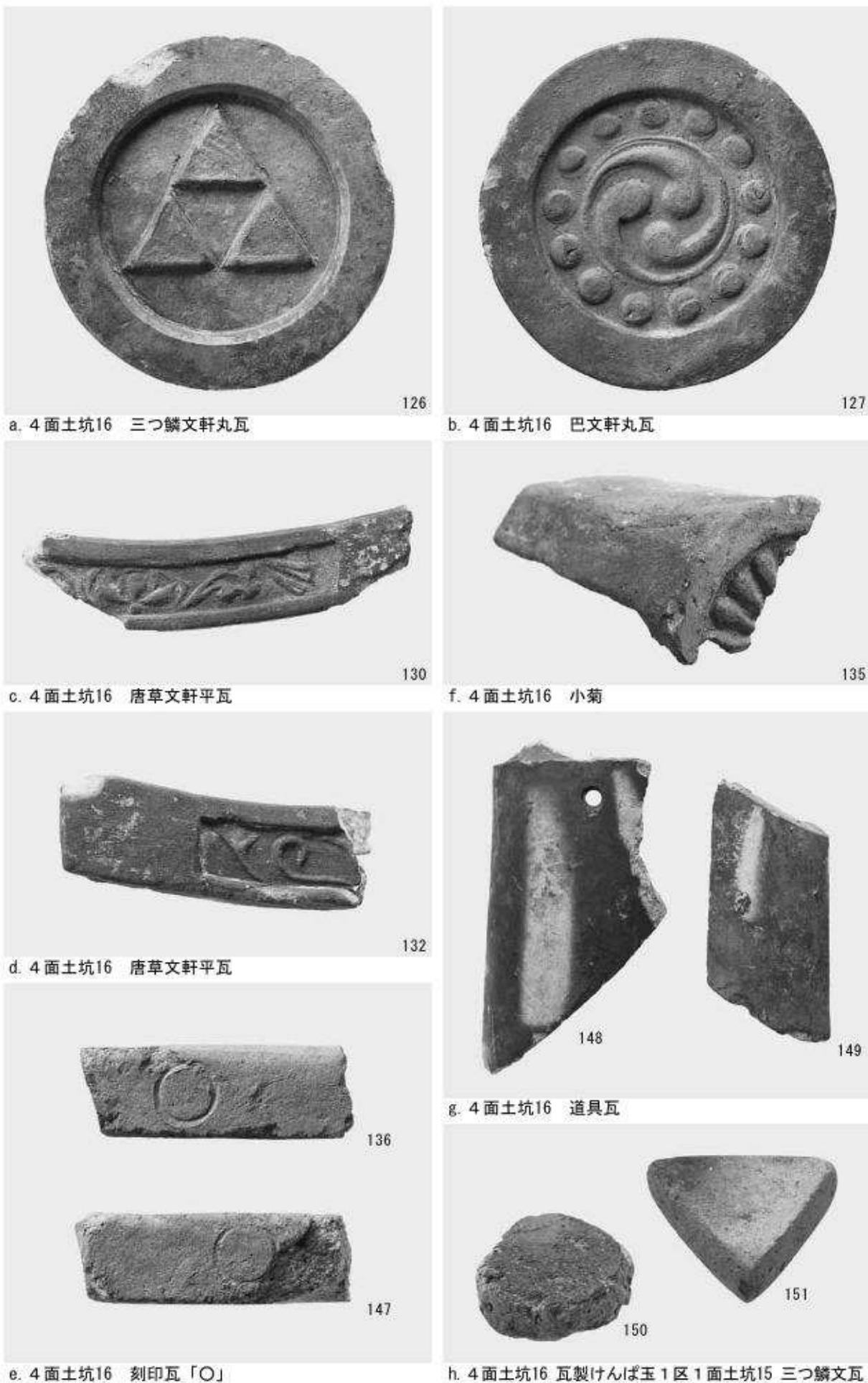
a. 2面溝5 雁振瓦



48

b. 2面溝5 雁振瓦(線刻)

図版
20
1区・2区遺物





137

a. 3面瓦積 巴文軒丸瓦



140

141

b. 3面瓦積 唐草文軒平瓦・軒棧瓦



144

c. 3面溝18 巴文軒丸瓦



152

157

d. 3面溝18 熨斗瓦(線入り)



153

158~162

e. 3面溝18 平瓦



156

f. 包含層 巴文軒丸瓦

報告書抄録

ふりがな	さやまはんじんやあと に
書名	狭山藩陣屋跡 II
副書名	一般府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う発掘調査
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	2014-6
編著者名	小林義孝・橋本高明・西口陽一
編集機関	大阪府教育委員会
所在地	〒540-8571 大阪府大阪市中央区大手前二丁目 TEL.06-6941-0351 (代表)
発行年月日	2015年1月30日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °.′.″	東経 °.′.″	調査期間	面積(m ²)	調査 原因
		市町村	遺跡番号					
さやまはんじん やあと 狭山藩陣屋跡	おおさか ふ わねさか さ やま し 大阪府大阪狭山市 ひがしきけじり に ちよう め 東 池尻二丁目・ さ やまざんちより の 狭山三丁目	27231	65	34° 30' 42"	135° 33' 58"	20140109 ~ 20140213	150m ²	記録 保存 調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
狭山藩陣屋跡	城館跡	江戸時代	大手筋と水路 藩主・藩士の屋敷跡	瓦類、陶磁器	藩主北条氏を示す遺構・遺物を検出
要約	北条氏を藩主とする狭山藩陣屋跡の区画を示す大手筋・水路と隣接する屋敷跡を調査。				

大阪府埋蔵文化財調査報告2014-6 狭山藩陣屋跡 II 一般府道河内長野美原線の交通安全事業に伴う発掘調査
発行 大阪府教育委員会 〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目 TEL 06-6941-0351 (代表)
発行日 平成27年1月30日
印刷 株近畿印刷センター 〒582-0001 大阪府柏原市本郷五丁目6番25号